明治四十三年二月二十日發行

（明治二十一年本會創立）

婦人衛生雜誌

第二百四十三號

第三種郵便物認可明治廿六年四月四日
毎月一回二十日發行
内務省許可明治二十一年二月二十八日

私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌

第貳百四拾三號目次

大日本婦人衛生會

三月例會通知

來る三月五日（第一土曜）午後一時三十分より神田一ッ橋通り女子職業學校内に於て例會を開き左の講話有之候間萬障御繰合せ御知友御誘引御來會被下度候也

一血の話（縮き）　醫學博士　二木謙三君

明治四十三年二月

私立大日本婦人衛生會

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一年を送らんを皆ともに希はざるはあらじされども其身健康にあらざれば此生活を得んといと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〳〵衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆吾等婦人のもつぱら掌るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相尋て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に喜ばしきことなりされども夫の衛生の事に至りては更に注意を惹かざるもの丶如くまことに口惜しきことなり因て頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々に衛生上諸般の講義演說談話を乞ひ互に相研究し尚之を筆記して册子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす茲に本會旨趣の梗概を敍べて廣く江湖の諸愛姉に告げ其贊成を仰ふぐこととしかり

明治二十年十一月　首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則摘要

（明治廿二年十二月改正）

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するにあり●第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設くることを得●第三條　本會會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得●第四條　入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員章を交付す（交付手續卷末に詳なり）入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三拾錢以上、通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす●第六條　男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とする其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを認みたる節は役員の協議に依り無會費とすることあるべし●第七條　會員は本會に於て每月發刊する雜誌を無料にて受ることを得●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻せず●第九條　本會に推戴員を置き其中より總裁一名を奉じ皇族の妃殿下に願出るものとす●第十條　本會に左の役員を置く　會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員二十五名、書記若干名●第十一條　會長副會長幹事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命ず但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託することあるべし●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け諸記錄雜務を掌る幹事の分課を設け第一會計、第二編輯出版、第三庶務とす●第十三條　臨時指名委員の[illegible]長副會長幹事評議員の任期は二ヶ年とす滿期再選することを得若し任期中缺員を生ずるときは次點者を以て補缺す●第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す●第十六條　集會は例會總會及評議員會とす集會は八九月を除くの外毎月一回とし總會は三月に之を開く若し急要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし又春秋二回會員相互親睦の爲め園遊會を開くことあるべし●第[illegible]經驗ある人々に衛生上の　講義演說談話を囑托し會員を[illegible]むるものとす●第十八條　會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會々場に誘致し講義演說等を傍聽せしむることを得（但衣服は質素たるべき事）●第十九條　講義演說等は男子の傍聽を禁ず●[illegible]改正其他重要の件議定のこと●第廿一條　毎年三月總會に於て會計の收支決算並に庶務の概要會員の增減等を報告すべし●第廿二條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす●第廿三條　本會の收支は總て會計擔任の幹事檢印を要するものとす●第廿四條　會計は一ヶ年毎に決算し翌年三月總會に報告すべし

支會●第廿五條　地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得●[illegible]員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を[illegible]開後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所[illegible]會員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付す[illegible]の規定に依るものとす●第廿七條　支會には支會限り[illegible]を得●第廿八條　本會の雜誌は支會に回送すべきを以[illegible]り本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を請求[illegible]亦同じ●第廿九條　支會は集會の都度其狀況を本會に[illegible]第三十條　本會は毎月一回雜誌を發刊し之を會員に配[illegible]條　本會々員以外の者にして金圓若くは書籍物品等[illegible]者あるときは本會長の名を以て謝狀を贈り寄贈者の姓[illegible]登錄し尚本會雜誌を以て報告すべし●第卅二條　會費[illegible]すべし●第卅三條　會員にして小爲替又は郵券にて納む[illegible]費と[illegible]料を添へらるべし（郵券送一割增）[illegible]東京府下に限り每月領收人を差出すべし地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所所在の郵便局（麴町區富士見町郵便取扱所宛）振出すべし●第卅四條　會員中若し本會の障礙となるべき所爲ある者又は會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若くは廣告することあるべし

東京市麴町區富士見町二丁目卅二番地

私立大日本婦人衛生會

○役員姓名

総裁　東伏見宮依仁親王妃　周子殿下

會長　侯爵夫人　鍋島榮子

副會長　男爵夫人　濱尾作子

（いろは順）

幹事　鳩山春子
同　羽田三緒子
同　岡田徳子
同　高木鐐子
同　山本多穂子
同　松平芳子
同　三浦敏子
評議員　石川貞子
同　岩下ゆか子
同　濱田捨子
同　長谷川仲子
同　服部繁子
同　仁禮壽賀子
同　西升子
同　土肥多越子
同　緒方悦子
同　岡山とし子
同　小川孝子
同　男爵夫人　加藤鈴子
同　片山龜子
同　吉武輝枝子
同　丹波貞子
同　高橋孝子
評議員　田村きよ子
同　男爵夫人　南部陽子
同　中濱芳子
同　山口貞子
同　子爵夫人　松井正子
同　岸澄子
同　三宅藤子
同　宮本樂子
同　宮下咲子

●支會、新潟、山形、宇都宮、高崎、米澤

本會特別賛成員

（いろは順）

醫學博士　入澤達吉君
理學博士　石川千代松君
醫學士　石原久君
醫學士　石原喜久太郎君
理學博士　飯島魁君
ドクトル　飯盛挺造君
醫學博士　伊藤隼三君
ドクトル　伊澤信平君
醫學博士　伊東祐彦君
色川圀士君
岩井禎三君
藥學博士　石津利作君
醫學士　磐瀬雄一君
長谷川泰君
法學博士　鳩山和夫君
萩原彌四郎君
醫學博士　林春雄君
原胤昭君
醫學士　橋本左武郎君
醫學博士　濱田玄達君
男爵　濱尾新君
醫學博士　芳賀榮二郎君
西田敬止君
ドクトル　西山信光君
本田增次郎君
醫學士　鳥居春洋君
醫學博士　土肥慶藏君
醫學博士　遠山椿吉君
醫學博士　大澤謙二君
醫學士　大野豐太君
醫學士　大西秀治君
子爵　小笠原長生君
ドクトル　小此木信六郎君
醫學博士　岡田榮吉君
醫學博士　岡田和一郎君
恩田重信君
醫學博士　緒方正規君
醫學博士　大澤岳太郎君
醫學士　渡邊房吉君
醫學博士　加藤照麿君
法學博士　文學博士　男爵　加藤弘之君
醫學士　河野衛君
醫學博士　河本重次郎君
醫學博士　金杉英五郎君
醫學博士　片山圀嘉君
醫學士　賀古鶴所君
醫學士　樫田龜一郎君
醫學士　唐澤光徳君
醫學士　甲野棐君
醫學士　米山彦郎君
横井忠國君
醫學博士　高橋順太郎君
男爵　高崎正風君
高嶺秀夫君
醫學士　高田畊安君
ドクトル　高山紀齋君
藥學博士　田原良純君
醫學博士　田代義徳君
醫學士　田村光顯君
醫學士　田村化三郎君
醫學士　竹中成憲君
藥學博士　丹波敬三君
法學博士　高木豐三君
醫學博士、男爵　高木兼寛君
理學博士　坪井正五郎君
醫學博士　土田卯三郎君
男爵　辻新次君
醫學博士　中濱東一郎君
醫學博士　長與稱吉君
藥學博士　長井長義君
男爵　南部樂男君
醫學博士　能勢靜太君
醫學博士　久保猪之吉君
醫學博士　栗本東明君
醫學士　栗本廉勝君
醫學博士　隈川宗雄君
醫學博士　呉秀三君
醫學博士　山田鐵造君
醫學士　山田弘倫君
醫學士　山根正次君
ドクトル　山上兼輔君
ドクトル　松山陽太郎君
丸山長四郎君
ドクトル　富士川游君
醫學士　布施正頤君
男爵　後藤新平君
醫學士　古川榮君
小高良造君
小西信八君
醫學士　寺田織尾君
醫學士　寺田豐作君
寺田勇吉君
醫學博士　朝倉文三君
子爵　秋元興朝君
足立寛君
ドクトル　朝山義六君
醫學士　淺田決君
醫學博士　佐藤達次郎君
醫學博士　佐々木政吉君
醫學博士　榊順二郎君
醫學博士　榊保三郎君
醫學博士　櫻井恒次郎君
醫學博士　佐藤三吉君
齋藤清文君
醫學士　笹川三男三君
醫學士　櫻井郁二郎君
ドクトル　佐藤運雄君
醫學士　佐藤總齋君
醫學士　澤崎寛制君
ドクトル　佐伯理一郎君
醫學博士　木下正中君
醫學博士　桐淵鏡次君
醫學博士　木村徳衛君
醫學博士　北島多一君
醫學博士　北里柴三郎君
醫學士　北村精造君
醫學博士　北川乙治郎君
ドクトル　菊池循一君
醫學博士　三輪信太郎君
醫學博士　宮本叔君
醫學博士　宮本仲君
宮川保全君
理學博士　箕作佳吉君
水原漸君
醫學博士　三宅秀君
醫學博士　三浦謹之助君
醫學博士　三島通良君
醫學博士　三浦守治君
島田三郎君
ドクトル　志村誠麿君
醫學博士　島村俊一君
ドクトル　日高昂君
醫學博士　弘田長君
伯爵　土方久元君
醫學士　百瀬玄溪君
醫學士　森田正馬君
文學、醫學博士　森林太郎君
醫學士　澄川徳君
ドクトル　須田卓爾君

講演

腸の機能に就て（承前）

醫學士　上尾岩保

腸自己が冒された時には器質的に變化を來たした場合と、さうでなくして機能的變化に因る場合との二つに別けます。器質的には第一には潰瘍である、例へば腸の結核、赤痢、(之れも矢張り特殊の黴菌に因るところの腸の潰瘍です、)それから癌腫も潰瘍を作ります。是等は餘り稀れな病氣であつて且つ皆樣に興味のないものでありますから、略します。第二には加答兒です、是れは非常に多い病氣であります。

腸加答兒と云ふ事をお考へになる時には、いつでも鼻風邪を引いた時の事を思ひ出されると、凡ての事が直ぐ御解りになります。鼻加答兒の時には、第一に、鼻が詰まる、鼻の内の粘膜が腫れ上つて、此處へ血が澤山寄つて來て詰るのである。從ふてさう云ふ時には、分泌液が多く出で來る。矢張り腸加答兒の時にも、同じ樣に粘膜が腫れるのみならず、非常に分泌が多くなる、而して其分泌液は、容易く腐敗する特有の性質があつて、少し時を經ますと、アルカリ性となつて、非常な臭氣を發つ樣になり、且つ烈しく腸の粘膜を刺戟するから、腸の運動が盛んになり、下痢を起します、下痢を起す原因は、無論運動の高まる事が關係しますが、本來は分泌が非常に烈しい時に來るものであります。腸に加答兒があつて、分泌の多い時には、粘液が共に出て來る、粘液腺といふものが腸にあるから、其處から澤山出て來る、それ故加答兒がある時は、便を檢査して、粘液と、粘液以外の他の分泌物が出て居るかと云ふことを

も調べなければならぬ。夫れ等を能く調べますると、甚い加答兒があるか、或はさうでないかと云ふことが解ります。粘液のことは普通何んな方も御承知の事でありますが、此の以外の容易く腐敗する所の物質、例へば溶解蛋白、さう云ふものは、近來までは、醫者でさへも注意しなかつたが、加答兒とは大なる關係があると云ふ事がわかつて來ましたから、今後は之れも充分しらべなければならぬ様になるだらうと思ひます。

さうして下痢の時には、いつでも神經的症狀が供なつて來る、例へば、人によりまして不消化の香の物などを召上りますと、また胃から腸の方へ出で行かない内に、已に下痢を起す様な事がある。斯う云ふ様な時には、非常に神經が刺戟性となつて居つて、下痢を起すのでありますが、併しながら、本當の神經性の下痢と云ふ事は、極めて稀れな事であつて、大抵の場合は、慢性の腸加答兒が、僅か何處にか潜んで居つて、何か非常に心配したり不消化と思ふて居るものを食したりする度毎に、其の神經性の關係が加はつて、下痢を起すのであります。

斯う云ふ風に加答兒を起した時の處置に就ては、如何なる食事を取つたら宜いかと申すと、勿論是れは一々醫者に就いて指圖を受けなければならないのですが、併し大體を申し上げると、刺戟がなくして、容易く消化し、さうして腐敗に抵抗するやうの食物が最も宜しいのです。さう云ふ食物は何かと云ふと、西洋では、燕麥から取つた「スープ」等を用ゐる、が本邦では重湯、葛湯等が此場合には最も宜しいのです。此等は能く消化をなし且つ刺戟は少く、醱酵も、腐敗も殆んど起さないからである。一體何う云ふ譯で、澱粉が宜しいかと言ふと、加答兒の時には何時でも、腐敗し易いところの、溶解蛋白が澤山糞便中に出て來る、其の溶解蛋白の腐敗をば、澱粉が防ぐからである。始めから牛乳などを與へると、却て牛乳は腐敗を増惡せしむる恐れがある。夫れでは如何なる時に牛乳を與へたら宜いかと言ふと、始めは、

重湯、葛湯の中へ牛乳を少し宛交せて與へ、日を經るに從ひ、段々に牛乳の量を增して澱粉の量を減らす。さうすると、牛乳も後には、大抵慣れて腐敗しないやうになる、其の以外の藥用的の事は、無論醫師の指揮を受けなければならぬのです。

斯う云ふ加答兒の場合には、安靜にして居り、刺戟の無い食事を取つて居れば、自然に癒るやうになる。作併斯う云ふ加答兒が、或る一程度まで進んで來ると、腸の粘膜が萎縮を來す事があります。萎縮を來す時には消化吸收が惡るくなるばかりでなく、他の一つの特別の關係を來す。此事は日本には多いか、何うかは私は調べた事は有りませぬが、隨分多いだらうと思ひます。即ち慢性の腸加答兒に罹つて居る人に、非常なる貧血を來すことである。それは腸の粘膜からして、「リポイード」といふ、脂肪に似た物質を拵へて、それが吸收されると云ふと、血液が溶解される、まう一つは、骨髓なる血球製造所を犯して、其機能の不全を來し、貧血を起すのである。此の事の研究は近來に始まつたので、初めタルクヴヰスト氏が、廣節條蟲に罹つた人は、時として高度の貧血を呈するが、之れは何の爲めなるかと調査した處が、此の條蟲の體には「リポイード」物質があつて、之れが血球を溶解する作用があると云ふ事を發見しました。此の廣節條蟲は、日本殊に東北、北陸、北海道等の鮭、鱒を生にて食する地方には、隨分蔓延して居る樣です。

是の實驗からして、近來腸の慢性加答兒と云ふものは、矢張り「リポイード」物質を製造し、之れが貧血を起すと云ふ事を唱へ、且つ實驗的に證明を試みる樣になりました。

私も獨逸に居つた時に、斯の樣な仕事を致したことがあります。それは「アルコホール」、胡椒其他を犬に與へ、胃と腸とを刺戟し、加答兒を起さする事一ケ月餘の後、此の犬の胃腸粘膜と、健康なる犬より得たるものを比較して、其血球溶解作用を調べて見ましたが、其差が甚しくありまして、加答兒の胃

腸粘膜の「リポイード」と云ふものは、非常に血球を溶解致し、夫れを兎犬などに、注射すると貧血を起すと云ふ事實を發見致しました。さう云ふ譯で慢性加答兒は、非常に長時日等閑に附して置くと云ふと、後には貧血の如き惡るい症狀を惹起して來るからして、適當の時期に充分なる治療を施さなければなりませぬ。

器質的疾患の事は夫れだけにして置きまして、機能的の腸障碍、卽ち腸の機能が冒された場合に就いて少し申上げやうと思ひます。夫れで、例へば腸の分泌の障碍がある場合、卽ちリーベルキューン氏腺から、腸液を分泌しますが、其分泌腺が冒された場合には、何うかと言ふと、その時には醱酵性の消化不良と云ふ症狀を起す。是は近頃まで、日本では餘り注意して居らないで、單純なる腸の加答兒と思つて居つた樣でありました。此の醱酵性消化不良症と云ふのは、胃に故障がある時にも來りますが、腸自己に分泌障碍がある時に起る病氣であります。此の症狀は、私の考へでは、日本にも隨分澤山あるだらうと思ひます。實は自分も未だ歸朝して間もなく夫等を調べる暇がありませぬから、詳しい事は解りませぬが、彼方に居つた留學生などの中に、隨分此の病氣に罹つて居る人があると云ふことを知りました、此の症狀に罹りますと、柔かで粥の樣な便を、一日に二三回排泄する、又甚だ失禮な御話ですが、常に放屁が伴つて來る。さうしてその臭氣が非常に固有であつて、醋酸、牛酪酸の如き臭ひが致します。これは私共のやうに、さう云ふものを日々取扱つて居る者は、臭を嗅いだゞけで、其症狀の診斷が出來る位であり、且つ此糞便には、瓦斯が澤山含まれて居ります。此の症狀は打捨てゝ置くと云ふと、何時も其醱酵物が腸を刺戟して居るからして、其爲に段々と腸に炎症を起し、後には本統の腸加答兒を供なふ樣になり、非常に癒りが惡るくなります、それ故初期の中に充分治療する必要があります。それにはどう云ふ處置を執らねばならぬかと云ふと、腸液といふ

ものは澱粉を消化するのに、其の腸液の出て來ない時に、若し澱粉を澤山取つたならば、尙々澱粉消化不充分となり、醱酵を起す、それ故澱粉の量を節減し、脂肪と蛋白質を多く與へ、さうして段々澱粉の量を、症狀の輕快するに從ひ增して與へるのです。さう云ふ風にして治療して行けば、加答兒にならずに、其儘で癒ることがあります。此の事は餘程注意しなければならぬ事だらうと思ふのです。

次に吸收の障碍と云ふものに就ては、腸には腸の吸收だけが、特に原發性に冒された場合は殆んどない、何時も分泌が先きに冒されるとか、或は運動が先きに冒されて、さうして後に吸收が冒されるのでありますが、此事は別段申上げませぬ。

最後に私は腸の運動障碍に就いて一寸一言申上げやうと思ひますが、運動の障碍の中に二種ある。一つは下痢です、下痢の時には腸の運動が烈しくなりて食したるものが直ぐ排泄さるゝ。他の一つは便秘であります。今此の二つに就いて簡單に申し上げますが、此の下痢と云ふ事は、疑ひもなく腸の運動が高まると、起るのであります。例へば皆さん御承知の通り、下痢の際召上つた食物は、大概四五時間で體外に排出されます。

運動が高まると云ふと、腸管內で消化したり、吸收することが不充分になり、腐敗分解を起し此物が腸を刺戟する、腸を刺戟すれば其結果亦々腸の運動を高める、卽ち高まりたる運動が原因で、後には之れが又運動を高めて來て、終始循環して居る。從來は、之れで下痢を說明して居りましたが、これ丈けでは充分說明出來ない場合がある。それは外ではない、粘液其他の容易く腐敗分解を起す物質が、腸壁より分泌され、この物直に腐敗を起し、腸壁を刺戟し、次で運動を高める。卽ち分泌增多が主であつて、運動亢進が從の場合が、決して尠くないと云ふ事が認められて參りました。

下痢の際には、吸收は通常割合に冒されない事が多い、卽ち排泄した物を見ると、比較的能く消化して

居ります。併し夫れも物によりては、吸收がさう充分に行かない事は無論ある。下痢の時に、吸收機能が割合に犯されぬと云ふ證據には、この際砂糖を澤山與へて見ても、大便の中に砂糖は決して出て來ません。

下痢に對する處置としては、其糞便を能く檢査しまして、醱酵が甚しいか、又は腐敗が烈しいかと調べそれに應じて食餌的の療法を施さなければなりません。醱酵が甚しい時に澱粉類を與へ、又は腐敗が烈しい時に蛋白質を與へると、一層其症狀が烈しくなり、醱酵腐敗が增して來ますから、其の反對の處置をしなければなりません。卽ち醱酵の際は澱粉類を多く與へ、腐敗の時は鷄卵、軟かき肉類を與ふるのです。

下痢するからと言つて、何時でも同じ食物を造ると云ふことは出來ませぬ。今日までの普通の治療を見ますると、下痢をすると、其糞便の性質如何に拘らす、一定の食物を取らしむる樣ですが、これは合理的ではありません。醱酵と腐敗と云ふものを區別して食物の取捨をせなければならぬと思ひます。食物の外に無論寢て居て安靜を守ると云ふ事も必要であります。

尙ほ一ッ便秘の事に就いて少しく申上げやうと思います。先程胃の鹽酸過多の時、胃液は鹽酸が多いと、通常便秘を來すと云ふ事を申しましたが、胃に鹽酸が少ない、殆ど無いと云ふ時にも亦便秘を來す樣な事があります。然し鹽酸の無い時には、鹽酸さへ與へれば、自然便通が起きて來るけれども、夫れでなくして、腸自己が便秘の原因である事があります、夫れを別つて二ッとします。一ッは腸の遲緩性といつて腸が運動不充分なる爲め便秘を來すのと、もう一つは、一部分に興奮性の痙攣を起し、夫れが爲めに運動が不充分になつて便秘を起すのと、此の二ッの種類に分ちます、其等の便秘の時には、通常食慾は少しも變らない、五日も十日も便通なくとも、矢張り食慾は常の通りで、氣持もさう惡くない、唯

少し神經衰弱と云ふ樣な症狀を訴ふるに過ぎない事があります。

普通見る處の慢性便祕はどう云ふ風に消化を營んで居るかと言ふと、不思議にも便祕の時に於ては、消化が餘りよすぎる、其の證據には、凡ての食物が非常に能く消化して、其の殘滓が非常に少い、從ふて體外に排出する糞便の分量も少く、其爲めに便祕すると云ふやうなことになるのであります。殊に非常に面白い事は、植物性の纖維素、例へば豆の皮であるとか、或は鞘豆の筋の如き物は健康の人では消化を完ふしないで體外へ出て來る。ところが慢性の便祕に罹ると、其の健康な人でも消化しない樣なものが、消化してしまふ。この消化が非常によいと云ふ事は、腸内に如何なる結果を來すかと云ふと、吾々の腸内には一定の黴菌が必要なので、其の黴菌を播殖するには、滋養物がなければ不可能である。それ故便祕せる便中には黴菌の量が普通の二分一に減じて居る。この黴菌が少ない爲め腸の刺戟が減じ、腸の運動が非常に緩慢になつて、遂に便祕を來します。この考へよりして、一時西洋では、人工的に此の黴菌を造つて、それを藥として與へたことがありましたが、其效が無かつた。この理は慢性便祕と云ふものは、黴菌が少い結果でなくして、黴菌を發育さする培養器、即ち糞便が黴菌の發育に不適當なる程滋養物がなくなり、多數の黴菌を與へても、之れが播殖が不充分でありますから、便祕を治する效がないのであります。

其他如何なる處置を施すかと云ふと、普通一般に、さう云ふ場合には黑パンとか、サラーダ(菜)、其他植物性の纖維の多いもの、果物――果物は殊に胡桃を撰みます、胡桃といふものは、脂肪が多くつて、非常に消化が惡い、これらの如き消化の惡い物を與へて、少し消化を惡くして治療しやうと企つたことがある。併しながら、植物の纖維の如き不消化物でさへも、慢性の便祕の時には、殆ど皆消化してしまふのであるから、黑パンなどでは目的を達すること

が出來ない。それで粉糠であるとか、木の屑を服ましたり、甚しきは砂を服ましたりして、色々實驗して見ましたが、思ひの外效が薄い。その理は、此等の物は單に糞便の分量を多くすると云ふだけで、他の必要な條件を備へて居らぬ。糞便の分量が多くなると、同時に其の糞便が軟かにならなければならぬ軟らかになるには、糞便に適當なる水分を含ませねばならぬ。此等の條件を備へて居るもので、普通の治療藥として用ひますのは「レグーリン」(寒天の細切せる者に「カスカラ」を少量に加へたるもの)です或は又乾した普通寒天を細かに刻んで、それを一茶匙から二食匙位、重量に換算すると、二瓦から八瓦までを、一日三回食後に服ませると、其の寒天がまだ水に浸さないのであるから、胃に入つてふやけて水を吸收する、水を吸收して澤山な分量になり、且つ軟かになる。軟かいから胃にも、腸にも障らずして、糞便の量を増し、一日一回位排便する樣になります。實際この方法は效能があるやうであつて私もさう云ふものを與へたる多數の例を實驗しました。此の慢性の便秘は、さう云ふやうに所置すれば宜しいが、然し多くは、さう云ふ場合に、醫師でも素人でも、直ぐ下劑を用ひる、ところが其の下劑は、唯一時的に腸を刺戟するだけであるから、下劑を中止すると直ぐ元の便秘に歸る。この療法を度々反復すると、遂には藥劑に慣れて、多量を飲まなければ效がない樣になりますから、下劑の使用は大に注意しなければなりません。此外安靜を守り、大量の牛乳飲用、牛酪攝取等も大に效ある樣であります下劑を使用せざる灌腸法も亦よろしう御座います。

最後に尚一言申上げて置きたいことがあります。其れは外でもありません、凡て腸の病氣の時に、第一に注意しなければならぬことは、それが本當に腸の疾患であるか、或は寄生蟲症即ち蛔蟲なり、十二指腸蟲なり、或は絛蟲なりが、體內に寄生して、さうして此の腸の働きが惡いと云ふと、同じやうな症狀を呈するのかと云ふことを、區別する事でありま

す。これには先づ第一に糞便を檢査して見れば解るのであります。糞便中に、蟲卵が在るか、無いかを定めるのであります。此の事に就きましては、我が日本の衛生状態は、實に遺憾に堪へられないのであります。私がハルレ大學に居つた時に、西洋人の便を數百回檢査した時に、唯一回蛔蟲卵を見付け、教授へ示したる處、早速學生に見せると言つて大に喜ばれた事があります。ところが本邦では何うかと言ふと、先づ蛔蟲の卵の無い人はないと云ふて差支ない位である。現に私自身が西洋へ行つた時、自身の便に蛔蟲卵を見ましたから、直ぐ樣驅蟲して教室の助手へ示した處、大層珍らしがられました。

日本人には獨り蛔蟲ばかりではなく、十二指腸蟲、蟯蟲、鞭蟲などが非常に多い、實に遺憾の極である。此等の寄生蟲の侵入門戸は未だ確定しない。十二指腸蟲は、近來皮膚から入ると云ふ説に賛成する人が見へますが、日本の状態から考へると、未だ全然さう云ふ説に賛成が出來かねます、即ち隨分よい御方で決して跣足でお歩きになる樣なことのない御方にも、十二指腸蟲症に罹つて居るのを見受けます。此等からして生水を飲んだり、又は生の野菜を澤山食したりして、經口的に消化器より傳染すると云ふ説は、まだ〲否定する事は出來ないのである。西洋では、糞便を肥料に用ゆると云ふ事は致しませぬから宜いが、本邦では、何うも經濟的の考へからも、此等蟲卵を含んで居る糞便を肥料に用ひるからして、生の野菜は隨分傳染の危險は多いだらうと思ひます。

それ故に本邦に於きまして、若し腸の機能障碍を呈する人がありましたなら、先づ第一に糞便檢査を致し、蟲卵の有無を確め、それから後に先き程申し上げた機能檢査をするが必用だらうと思ひます。

叢談

年の老けるのを防ぐ法

ドクトル　富士川游

若い時は、まことに、光澤のある、きめの細かい、顔の面も年が老けると、皺が出來る。これは、身體の生長に從ひて、まことに、已むを得ぬことであるが、しかし、年頃になると、年が老けるといふことはたれでも好かぬことである。殊に御婦人方では、一とつ二たつと、段々年をとつて、顔に皺がよるといふことは、まことに、心配の種である。若し、年が老けて、顔に皺の出來るのを防ぐ法が、あつたらと、これまでも、隨分、氣をつけて居つた人が多かつた。しかるに、近頃リナ、カヴアリエリーといふ人が、獨逸國で刊行せらるる『醫事顧問』といふ雜誌に、この事につきて、一つの方法を示したものがある。面白いことと思ふから、その大體を、御紹介いたさう。

全體、顔に紋線の出來るのは、小さい時からのことで、決して心配すべきことではない。善く見ると、小兒の頸に、二つの小さい紋線がある、これは『美の線』といふものであるが、多數の婦人は、これを氣にして、その紋線を取つて仕舞はうとする。固よりこれを取ることは出來る、しかし、これを取て仕

第一圖

枕ニ頭ヲ持タセテ筋ヲ張レバ頸ノ皺ヲ防グ



舞へば、折角美しい頸が美しくないやうになる。肥え太つた頸では、おのづから、この紋線は無い。顔の紋線は、左ほど心配すべきものでは無い。御婦人方はこれを氣にし過るのである。年を取つて、顔の上に顯はれる、第一の標徴は、筋肉の弛緩である、顔の筋肉がおとろへるといふことである。

第二圖

口ノ周圍ガ最初ニ年老ルコレヲ防グニハ正シキ按摩法ガ最モ宜イ



御婦人方は毎朝、鏡に向つて、自分の顔を檢めてござる、若し、顔の一部に、弛味のある所が見付かつたら、これが年を取つた第一の標徴であるとお考へなさい。それから、これをなほすのには、その部の血液の循環をよくするといふことが肝要である。それで、マッサージをここに施すといふことが一番善い方法であるが、マッサージを施すには注意して、輕々しくこれを行ふてはならぬ。若しマッサージの仕方が惡い場合には、却て害があつて、いつそ、やらぬ方が善いのである。たとへば、頬の筋肉が弛んだ場合には、顴骨の上端から腮の邊までが袋のやうになつて、それから、頸の方までにも及ぶのである。それで、腮の筋肉が弛みて、腮が二重にも、三重にもなる、これが年を取つた標徴である。若し若い人でかういふやうな場合には、年を取つたやうに見えるこのときには、腮の筋肉にマッサージを施すことが

第三圖

頸ノ線ガ無クナラヌ樣ニ頸筋ガコリ隆マツテ居テハナラヌ



肝要である。

マッサージを施すに兼て、頭を正直にして居ることに注意し、寢るときにも、頭の位置を正しくし、頸を伸ばさないやうにせねばならぬ。枕の高いのは、衛生の上にもよろしくないが、頸の美線をも害するものである。寢て鼾聲をせぬものなれば成るたけ、背を下にして、寢るが善い。

第四圖

立離レテ居ル耳ハ繃帶デ正シイ位置ニ慣ラサ子バナラヌ



耳の下の方にも皺が出來る、これは小女にもあることがある、しかし多くは年を取た標徵である、これもマッサージでなほすやうにせねばならぬ、又繃帶か、何かで、耳をおさへつけて、寢るやうにすると、耳の下の皺を除くことが出來る。

顏の皺ばかりではない、頭の毛も白くなる、之も耳の邊から始まるのが常である、夫で髮が白くなつたのが見附かた時は、まづ、これをその根から剪み取るがよい、拔くのはよろしくない剪り取てもまた〳〵白い毛が、生えたときは仕方が無い、毛を染む

第五圖

二重頤ノ處ハ出來ルダケ早ク按摩セ子バナラヌ



第六圖

最モ效能アル按摩法ハ顋顏ヨリ頤マデノ面全體ナ包括スル



藥をつけるがよい。毛を染る藥にも色々あるが、その内で一番善いのはヘンナである。髮の毛が、灰白になつて、薄くなつて來たときはラノリンをたびたび塗がよい。

身體が弱く、貧血であると、早く年を取るから、身體を强壯にせねばならぬ、それには身體を靜にし、安眠し、善い食物を用ふることが大切である、貧血の人は、ホウレンサウ、胡蘿蔔、綠豆、西洋の野菜でスピナートなどを食するがよい。

養生譚

緒論

木と木を磨りて火を取つた時代から、火打石、火打金、附木、燐寸を用うる世の中となり、松明、蠟燭を灯して夜を照したが、行燈、カンテラの時代より忽ちランプ、瓦斯燈、電氣燈の世の中となり、牛馬が滊車、電車、自轉車、自働車となり、早馬が電信電話となつた、文明進歩の跡は實に驚くべきである。これはつまり人間の智識が發達して生活に便利な方法を考へる、便利になれば、多く活動が出來る、活動するには益々便利な方法を考へねばならず、これを考出すには智識が要る。斯樣な譯で、一歩〳〵智識が發達し、文明が進歩して今日の有樣と相成つたのであるが、これが未だ何處まで進んで行くものか分からない。が然し人の身體には限がある。五尺の身體が一丈に成らうとは一寸考へられぬ。考へられぬのみならず、今日の有樣では、五尺が三尺に成るかも知れぬ。と云ふのは、昔にありては、家も無ければ、衣服もない、每日寒さ暑さを犯して、野山を馳廻つて、獸と戰つて居つた。弱い者は無論生きても居れぬが、又自然强くもなる。やゝ進んで、牧畜をしたり、稼穡をしたりする時代となれば、多少の勞働はするが、これも極めて自由勝手で、全く面白半分の仕業で、益々身體も精神も平和にのび〳〵と養はれて來たことゝ思はれる、それが段々種々な時

代を經て進歩し發達して來て、靑天井の下に星を數へて居たのが、薄暗い帳場に算盤珠を撥くやうになり、大野原に霞を吸ふて牛を追て居たものが、工場の煙の内に危險な器械を操ることゝなり、飢れば手當次第に木實を食ふて居たものも、今は腰辨當で瘦腹をふさぎ、悠々鼻歌で鎌を研いで居たものが、汔々胸を狹めて筆を驅らねばならぬ世の中となつて來たのである。かう成つては、單に身體のみならず、その精神を勞することもなか〳〵一通りでは濟まぬ。昔は腕力を以て獸類と鬪つたが、今は精神を使つて、人間同志が競爭しなければならぬ世となつた。從て智慧は發達する、殊に惡智慧が甚しく發達した。斯樣な譯で、人の仕業は益々烈しくなり、生活法は複雜に成つて隨分無理な境遇に在て、身心共に無限の刺戟を被むると云ふ有樣である、そこで年々精神病患者、自殺者などが多く成つて來る。であるから、今五尺の身體が、今後一丈に成らうとは思はれぬ、寧ろ三尺に成るであらうと危ぶまれるのである。實際人間の身體は段々惡く成つて來て居る。變性して來て居る。けれども人間の智識は反對に發達して、自分の身體が漸次下等になり、はては滅亡するであらうと云ふ事に氣が付くに至つた。そこで斯の如き無理な、不都合に滿ちた生活の中にも、尙ほ且つ健康を維持し、更に強壯に成らうと勉める、是が今日の所謂衞生法、衞生學と云ふものである。而して此の衞生と云ふことは學問の進歩すると共に日々新なる研究、新なる發明があつて、種々樣々なる設備やら方法を講せられて、やがて文明に伴ふ不衞生的な事情にも打勝つて行けさうな模樣になつて來たのは誠に悅ぶべきことで、全く科學の賜と云はなければならぬ。かく云へば衞生と云ふことは、近頃に至て始めて唱へられた事のやうにも聞えるが、さうではない。只近世に至つて始て所謂科學的に研究されたと云ふに止まつて、實は人類の此世に出たそも〳〵の初より或意味の衞生と云ふものはあつたのであるけれども昔々は無論のこと、僅か五六十年前でも、

今日から見れば、隨分間違つた考をして居つたことが多い。これは當然の事である。然し幾萬年の昔か知らぬが、人間が此世に現はれた以來、今日まで此通り活きて殖えて來たのであるから、此間には自ら養生の心得や、衞生の方法が講ぜられて居つた。元來人類と云はず、生きとしいけるものは、皆死にたくない、生きたい、長生したいと云ふ根性がある。病氣に罹つて、痛い痒い目に逢ふごとに、養生法を工夫し發明する。それで此等の言傳へや、習慣や、色々な書物に見えて居る言葉の中には、今日の學問から考へても、なか／＼理由のある有益な事がある。

私は此等の古い學問の中から新しい言葉を拾ひ出して、自分一個の説明批評を加へて、皆様の御參考に供しやうと思ふ。一體順序を立てゝ歴史的に纏めて御話したいのであるが、今は其暇も無いから、手當次第に、然るべき言葉の見付かり次第、思ひ付いたまゝを書きつらねて、幾分なりとも御為になることもあらば幸と思ふのである。

（一）衞生の素

既に今日の様な形を具へた人間が、此の地球に住んで居たことは餘程古いことで、殆ど其始が分らないけれども此人間が段々發達して來て、色々な事を言傳へ、書き遺すと云ふ迄には、長い／＼年月を經たことであつて、其れまでの經驗といふものは、全く分らない、只野蠻人の生活法や、その思想などを參考して、矢張かうもあつたらう、あうであらうと推察するに止まる。然るに今日の學者の説に由れば、一人の人の身體の發育と云ふものは、人間が今日迄發達して來た、その跡形を繰返すものであると云ふ即ち人間種族の來歴を、一人の發育に縮めたものであると云ふのである。果して此説が眞であるとすれば、極々最初の人間の有様は、現在今の人の極々最初の有様で以て明かにすることが出來る譯である。從つて養生法も此時から論じ始めることが出來やうと思ふ。

そも／＼人の身體の出來る本を考へて見ると、猶太

敎の經文の中にある彼の創世記などには、神樣が最初土で以て人形を細工して、その鼻から生命の息を吹込んだ所が活きた人に成つたとある。物語としては誠に面白い、又これを宗教上の譬喩とすれば、餘程味の深い話にもなる、然しそれは別として、今日の學問上の研究では、先づ女の卵と男の種子が結び付いて、而して人間の身體が出來て來ることが明かになつて居る。しかも此の女の卵も、男の種子と共に立派な一個の生物である、即ち細胞である。これと同樣に一個の細胞が一個の動物である所のものが幾らもあるが、此等の中には、食物に出逢へば手を出してこれを取つて體の內へ收め、何ぞ特別な刺戟を受くれば身體を縮めると云ふやうなことをするものがある。これがそも〳〵衞生の素、養生の芽となる働であらうと思はれる。即ち滋養物を取るとか、運動するとか、危害を豫防するとか云ふやうな事は、既に〳〵此時代に現はれて居る。畢竟生物あれば衞生があるのである。扨て又此の女の卵と男の種子が結び付く時にも、一個の卵に向つて無數の種子が進撃して行く、然し卵は只第一著に自分の所に到着した者を採用するだけで、其他のものは一切受附けない、これが間違つて二個這入れば、所謂雙胎になるのである。こゝにも一種嚴格なる、卵の衞生法が行はれて居るではなからうか。

次で種子と結び付いた卵、即ち受精して妊孕した卵は、種々複雜なる變化を營みながら、胎內十ヶ月の發育を遂げて、漸く一人の人間が出來上る譯で、此間にも、今云ふやうな意味の衞生が行はれて居る。その細かい事は措いて、今誰にも分かる一例を擧げて見やうならば、先づ胎兒は、母の腹の內の、子宮の內の、その又內の、袋の內の、水の中に手を拱き、脚を縮め、頭を屈め、極めて適當な姿勢を取つて安穩に浮いて居るのであるが、六七ヶ月になれば母親は、其子の動くのを感ずる、即ち胎動である、此頃に醫者や産婆が腹の上から診察する時に、胎兒の頭なり、足なりが在る所に手を觸れると、胎兒は其の

反對の方に逃げて行くのが分かる。此等も自然に行はるゝ自衛の働である。斯様な事柄は他の動物界に於て觀察すれば、實に面白い色々な事もあるが、茲には人の身體だけの事を御話することに止める。

（二）　體内の醫

前に述べた通り、人の身體の出來る元素、卽ちその卵、その芽の中からして、已に廣い意味で云ふ一種の衛生法が行はれて居るのであるからして、これが發育して出來た人體の中には驚くべき衛生法が自然に行はれて居ると云ふのは當然のことである。一體生理的現象と云ふのは、皆この身體自個の衛生法そのものであると云ふてよい。又病的現象の中にも身體自個の行ふ治療法が現はれて居る。

先づ嬰兒が、生れると直ぐ所謂産聲をあげる、これで以て肺臟が擴がり、血行も整ふと云ふ實に靈妙なる働であるが、又誰も敎へもせぬに、乳房を求めて巧に哺乳する。而して腹に滿つれば安穩に快く睡る、これが嬰兒の體に自然具はつた養生法である。啻に嬰兒のみではない、大人に於ても同様である。卽ち學問上の理窟や、法律に依て飲食しなければならぬぞと敎へられたり、命令されたりして飲食するのではない。胃に起る一種の感覺、卽ち飢餓の感覺に由つて自然必要な飲食物を欲し、これを取るやうになる、而して胃に滿つれば所謂滿腹し、元氣に滿ちて又働くのである。

皮膚に付て見ても、外氣が寒むければ、皮膚は收縮して、所謂膚に粟を生じて體温の發散を防ぎ、稍烈しい時は身慄をして筋肉を働かして寒さに堪えるやうにする。之と反對に、暑い時には、皮膚が弛んで盛に汗を出して體温を發散させる。これは孰れも身體に具はつた自然の養生法であつて、少しも是に背くことは出來ない、これに背けば則ち病氣である。飲食、衣服等に就て研究をし種々やかましく云ふ所の衛生學、衛生法と云ふものは畢竟この自然に行はれて居る身體自個の養生法が障碍されずに、正しく行はれるやうに氣を付けるに過ぎないのである。そ

れ養生、やれ衞生と云ふて、健康な者までが病人のやうなまねをするのは誤りで、それこそ却て不養生、不衞生といふべきである。

尚ほ又人の身體の內には、自然に醫者も居れば、藥も備はつて居る。それは如何なる事かと云ふに、先づ口から食道を通つて胃に行くべき飯とか汁とか若し誤つて肺に空氣が行く所の氣管の方へ行かうとする時には、忽ち烈しく咳嗽をして、その御門違の狼狽者を外の方へ追ひ出すのである。これが若しそのまゝ肺迄迷ひ込んだ日には、危險な肺炎などを惹起すことになる、それで精神の昏憒して居る樣な、重病人や、人事不省になつて居る者に物を飮ます時に、彼の怖るべき腐敗性肺炎を起すことがあるのである。

それから又何ぞ惡い物を食べたりした時には、胃が痛んで、これは良くないと云ふ診斷を知らせ、いよ〳〵胃の中に置いては宜敷ないとなると、之を突き返して口から外へ出してしまう、卽ち嘔吐と云ふものは、此の體內に居る名醫の手術に外ならぬのである。さて又これが腸まで行て仇をする場合には、早速水で以て流し出してしまう、卽ち下痢と云ふものも、體內の醫者の妙法に由るのである。それを辨まへずに、何でも吐けば、吐止の藥、下痢れば下痢止の藥と騷いで、譯の分からぬ賣藥で以て手療治をするなどは、體內の醫者に仇をして、いよ〳〵體外の醫者にまで迷惑をかけねばならぬ始末となるのである。

怪俄もその通り、先づ痛いと云ふので、其部に何か危害が及んだことを知らせる。若しこれがないならば、其處が如何にならうも知らずに居るであらう。彼の癩病人や、其他身體に麻痺した處のある患者が往々大怪俄をしたり、火傷をしたり、又少しの皮膚の創が大きく深くなつたりするが、これ全く痛みを感ぜぬからである。

次に血が出る。此時も切口の刺戟で以て、其處か縮んで、出來るだけ血を止めやうとする、又血が迸ば

しつて創口より這入つたものを洗ひ出し、出血の勢が弱くなると、血が塊まつて、自然に膏藥が出來て、其部を被ふて、外から惡いものが這入らないやうにする、而して創が治癒れば、自然痂皮となつて剝落つると云ふ譯で、體內の醫者の療治は眞に功妙なものである。それを無視して、餘計な烟草の粉はまだしもであるが、不潔物の塊なる袂の塵などを以て血止めにするものがある、實に言語道斷の仕打と云はなければならぬ。

以上は誰でも直ぐ分かることゝ思ふが、尙ほ我々の一寸目に視えぬ身體の中でも、此の醫者が絕えず診察治療をして居てくれるのである。例へば心臟の瓣膜病などで、心臟から血を送りだすに具合が惡くなつて、健康な場合よりも、强く心臟が働かなければあたりまへに血液が身體に循環れぬやうになる事がある。此時にはどうするかと云ふに、この體內の醫者は、其壁を厚くして血を送りだす力を强く爲るのである。又或る病氣の爲に、一方の肺臟が十分働けなくなると、體內の醫者は、他の一方の肺臟を大きくして、餘計に空氣を出し入れしてこれを償ふやうにするのである。腎臟に於ても同じやうに一方が病氣に罹つて其働が不十分になれば、他の一方の腎臟を盛に働かして小便を滯ほらぬやうにする。

其他若し身體の中に、種々の黴菌とか毒物などが這入つて來る時には、この體內の醫者は、それぐこれに對する毒消を調合し、或は、喰菌細胞などゝ云ふ兵隊を使役してこれと大戰爭をして、この怖るべき魔軍を撲滅しやうとして居る。今日の免疫學と云ふものは全くこの體內の醫者の戰術に基いたものである。

斯の如く吾々の體內には名醫が居つて、すべての病氣に對して、あらゆる豫防法と治療法を講じて居るのであるが、吾々は一向これに對して診察料も出さず、藥價も拂はず、感謝もせず、我儘なる不養生をして、遂にこの名醫も如何ともすることが出來ないやうな病氣を惹起すのである。それでも猶病氣とな

れば、周圍の人の同情を得、醫師の治療を受け、手厚く看護される。これを思へば、何人も死ぬのに不平は云へぬ筈である、それに何極樂に行てまでも、百味の飲食を喰はうなどゝは、何んと慾の深い話しではあるまいか。

（三）　少食と野雪隱

昔或人が、丹波頼長と云ふ名高い御醫者に、色々と養生の祕訣を問ふた、所が其答に「われは少食と野雪隱の外、別に養生の法とては知り侍らず」と申されたと云ふことである。これは餘程面白い言葉である。その少食といふのは、つまり飲食物を節制せよと云ふ意味であらうと思ふ。體の健康を保つ爲めには、是非十分なる榮養物を取らなければならぬのであるが、然りとて飲食を過しては却つて害になる。身體に必要以外の物を取れば、これは消化もせず、吸收もしきれず、果ては腐敗、醱酵などを起して、身體の、毒となり害となる。即ち身體に餘計な厄介をかけて、其の酬として害を受ける事となる。尤も胃腸が健全であつて澤山榮養物を取れば、多少これを身體の中に蓄へることも出來るが、それは主として脂肪であつて、別に大した健康上の得にもならぬ、只餓死する時などには、少し長持をすると云ふ位のことである。時には又脂肪がつき過ぎて却て害を來すこともある。兎に角、飲食物は平常過るよりも少ない方がよい。次の食事までには空腹になるやうでなければならぬ。それを美味物があると云ふて、腹の膨れるまで詰め込んで、直ぐ又時刻だと云ふて食べたくもないのに、無理に食べる。その外、茶よ菓子よ果物よと、胃の腑が應接に暇もない程間食をする。而して斯樣な人に限つて餘り運動などはしない人である。これでは胃も腸も堪えきれぬことになる。口淋しいとか、美味いとか云ふて、舌まかせに飲食をするのは、餘り考の無い話である。腹も身の中と云ふ言葉がある、又古來餓死するものよりも、食過ぎて死ぬものが多いと云はれる。獨逸あたりでは所謂溺死するものよりも、麥酒に溺れて死ぬものゝ方

が多いと云ふ話である。さうして見ると頼長の少食と云ふ言葉は、確かに養生法に於て大切な一つの祕訣と云はなければなるまいと思ふ。

次に野雪隱と云ふは如何なる事かと云ふに、これは言ひ換へれば、つまり郊外散步とでも云ふ意味であらうと思ふ。身體を健康に保ち、これを强壯にするには、飲食物の攝生と云ふことが大切であるが、前にも言ふ如く、幾ら滋養物を選んで、人の二倍も三倍も食べたからと云ふて、それで身體が强健になるものではない。これには矢張り所謂少食的の攝生法を守ると同時に、新鮮の空氣と、適度の運動が必要である。この要求を滿すものは郊外散步に加くはない。則ち是を賴長が所謂野雪隱と簡單に面白く言ふたのである。要するに、飲食を節し、新鮮なる空氣中に、適度の運動をせよ、然らば食物は能く消化して吸收され、血液は善良なる性質を以て全身を循環し、便通も亦自然に宜きを得て、身心自ら健全なるべし、是れ養生法の要義にして、此他別の仔細なしと云ふのである。

トラホームの話

トラホームの字義

トラホームと云ふ字の意義は、ざらざら、がさがさして居ると云ふ義です。譬へて言つて見ると砂利を敷いた街道の樣なものです。眼球を被ふ皮膚の裏は、御承知の如く、極めて滑らかなものである筈なのが、トラホームに罹ると石巾した樣にざらざら、がさがさして參るのです。

トラホームは、また俗に「ぬのめ」、「ぼろめ」と申しますが、これは、結膜の面が、凹凸になつて、縱や横に、瘢痕が出來て、丁度布の如くに見えるから、「ぬのめ」と云ひ、また「ぼろ」(發疹の義)が出來るから斯く申すと云ふことであります。

トラホームは何時頃からあつたか

トラホームは、此頃出來た新らしい病氣ではありま

せぬ、歴史を見ると、既に二千年の昔に於て、歐羅巴に在つたと云ふことです。

奈翁第一世が、埃及に遠征をした時に、三萬の兵士は、埃及で眼病に罹つたので、流石の奈翁も、面喰つて佛蘭西に引返し、軍の解散をなすべく餘儀なくされたと申すことである。

その他の國々に於て、時々大流行を來して、過大の損害を與へたことは、一回や、二回には止まりませぬ。日本に於ても、足利時代には、確かに此病氣があつたと云ふことでありますから、新に舶來した疾病で無いことは明である。

トラホームに罹る數

明治四十二年度の我國壯丁の「トラホーム」比例は、千人につき、最も多いのは、德島縣の五百十人、福島縣の四百五十六人、次では福岡縣の四百三十五人次では千葉縣の四百十八人、最も少きは、香川縣の三十六人、次に島根縣の五十五人、東京は六十二人で成績は、餘程良い方であります、槪して百、二百、三百代が甚だ多く、百人以下の所は僅かに二府八縣に過ぎないのであります。

曾て増野豐氏が、埼玉縣浦和町及びその附近で、五千八百三十七人に就て、健康診斷を行つたことがあつたが、その成績によると、トラホーム患者の數は、百人比例で三十七人餘を示し、其職業別を見るに、一番多いのは、灸鍼業で、六十六人、次は飲食店業、六十八人、次で理髮師及び旅舍何れも四十六人、藝妓屋三十二人、湯屋、三十一人、料理店二十九、下宿屋二十七人と云ふことになつて居ります。

トラホームは傳染病なり

トラホームは傳染性疾患である、されば一地方に流行性に現はれることもあるし、又家族の一人が侵されたために、全家悉くこの厄に逢ふたこともあります。殊に兵營とか、寄宿舍、監獄、工場等に於て蔓延し、大に其威を逞ふすることがあります。

トラホームは直接に傳染するにより、不潔の生活をなすものに多い、貧民窟の如き部落では、衛生上の

注意が十分に行き屆かぬよりして、不潔になり易い處から、一度此厄物に侵されると、これが周圍に蔓延して、いよ〳〵その害毒が大きくなる。
人々の研究によると、トラホームにかゝるものは男よりは、女の方に稍〻多いと云ふことであります。
眼に何か異常があると、害物に對する抵抗の力が弱くなるから、矢張トラホームにも侵され易いことゝなる、例へば塵の多い處に生活して居るものは、始終眼を刺戟して、或は手指などで摩擦したりするから、自然とトラホームの傳染を扶けることになる、紡績女工の如きものも、矢張り此の如き關係から、トラホームに罹ることが多いのであります。

トラホームに罹るとどうなるか

トラホームに罹つて居りながら、これを知らずに居る場合があります、これは素より極めて輕いものであるが、普通患者が、訴へる所は、まばゆくて、眼を十分に開けることが出來なかつたり、涙が出たり、何だか眼の中に這入り込んだように覺え、或は眼から汁の樣なものが出る、ひどくなると、痛くなり、眼が疲れたり、又思ふように物が見えぬようのことがあります。トラホームに罹ると、その影響を受けて、右述べた外に種々の症狀を呈して參ります。
外から見ると別段に變狀があるとも覺えず、學校、工場、兵營等で、眼檢査の時に、偶然見附けることがあります、又眼の開き方が狹かつたり、多少赤くなつて居ることがあります。
眼瞼と申して、眼の球を被ふて居る內側の粘膜は、ざらざらしたものが出來て、或は相重り、或は相合し、その狀一樣ではありませぬ。
かゝる粒々狀のものは、自然になくなつてしまふこともあれば、又破れて瘢痕が出來ることもあります。

トラホームの種類

トラホームは、その狀態に從つて、種々の區別を致します。性質の良いものは早く治るし、惡いものは治療に長き時日を要します。何れにしても、早く醫治を乞はねばなりませぬ、トラホームの種類は、種

種ありますが、其中で只一つパンヌスと云ふものが合併することがあります。これは、血の管が澤山に角膜の表面に出來て、上の方から、下の方へ進んで參ります、其狀は丁度簾の樣であります。これが漸々と延長して瞳孔の方へ進むと、物を視ることが出來にくゝなつて、甚しい場合には、全く失明者と同樣の狀態になります。これにも澤山の種類をわけますけれども、茲では略します。

トラホームは後にどうなるか

トラホームに罹つた後には、どうなるかと言ふことは、一定しては居りませぬ、何故と云ふに、其種類にも關係するし、且、醫者が初めて治療にかゝつた時期の遲速、治療法の適、不適等一樣でないからであります。

右の樣な次第であるから、全く治することもあるし、又幾分か視力の害を貽して治することもあり、甚だしい場合には、全然失明に陷るの不幸を見ることがあります。

トラホームの原因は何か

トラホームは、前にも申した如く、傳染病ではあるけれども、其傳染は、何物によるかと言ふことは、未だに定まつて居りませぬ、尤も此原因のことに就ては、今日多數の學者が、研究を續けて、種々の細菌を發見し、これこそトラホームの原因菌だと主張する人も大分出來て參りましたけれども、併しまだ絶對的に證認せられ無いようであります。早晩確かな細菌が發見せらるることと思ひます。

トラホームの豫防はどうするか

轉ばぬさきの杖、豫防してこれを防ぐことは、極めて大切の事である。

これには、トラホームは、傳染病にして、患者の眼から出る分泌物によりて傳染すると云ふことを知るのが、何より必要である。これは、直接に、又間接に傳染するから、何んでもその分泌物を媒介せぬ手段を講せねばならぬ。

間接の場合と云ふのは、例へば、手拭、ハンケチ、

洗面器の如きものより傳染する場合がある。それ故若し、家庭にトラホームの患者が出來ると、その人の用ふる手拭、洗面器の如きものは必ずこれを別にせねばなりませぬ、殊に下男や、下婢の不注意よりして、一家全體に蔓延する樣なことがあるから、よく注意をして、病毒を散らさぬようにすることが必要です。病者は素より早く醫治を乞はねばなりませぬ。此患者の寢室は別にして、同衾するようなことはよくありませぬ。女工、僕婢などを採用するに方つては、豫め眼の診査をして置けば安全です。

學校生徒にして、若しトラホームに罹りたる場合は忽ち登校を禁じ、適當の治療法を加へねばなりませぬ。復校は醫者の許可を得るまでは出來ませぬ、若しトラホーム患者にして登校する場合には、當局者が、始終注意して、例へば物品の貸借とか、遊戲の如きことをも禁せねばなりませぬ。

既にトラホームに罹りたるときは

出來るだけ早く、醫治を乞はねばなりませぬ、早ければ早い程、早く治する、又一旦トラホームに侵されたるものは、他人に傳染させぬよう、手拭、洗面器等は、決して他人に使用せしめてはいけませぬ。若し手後れて後、醫治を乞ひ、遂に失明の禍を招くが如きことありても、決して醫者を恨むことは出來ない。

傳染病の恐るべきは今更のことにあらねど、これは、その他の傳染病と異り只一局處に來るもの故、時としては世人からそんなに、注意せられぬ場合があるその結果他日累を多數の人に及ぼし、さては、國民の生產力を弱くするに至るものであります。小兒を取扱ふ父母や、教師達や、或は工場の如き場所にありては、特別に注意を要する次第であります。

寒氣の害

夏季のひどく暑い時に身體に害を及ぼす如く、冬の

極寒い時には矢張健康に害を及ぼすことゝなります特に温度の變化が烈しい時には、其害も著しく、斯様な時に感冒に罹ることの多いのでも分かります。然し温度が低いと申しましても、温の放散と發生が平均して居る場合には、大した害は起りません。但し適當に衣服を著て、善い飲食物を取つての事である。斯様な時には啻に害がないばかりでなく、寒さと云ふものは寧ろ益になる、と云ふのは、寒い時には身體の新陳代謝が旺になるからである、乃ち近來冬の運動が段々奬勵されて盛になつて來たのも主として此が爲であります。

今日に於きましては、昔の様に凍死すると云ふやうな危險は大に少くなりました、これは交通の便が開けて、寒中徒歩で以て長道中をせねばならぬと云ふやうなこともなくなつたからであります。然し吾々の身體は矢張多少寒氣の爲に犯されます。

玆には先づ餘り甚しくない、普通見る所の障碍に就いてお話を致しますれば、第一に赤鼻、赤耳、手足の凍え延いて凍瘡などゝ云ふものでありませう。一般に赤鼻の人、特に常に家の外で働いて居る山林官とか、工夫とか百姓、其他役人などで赤鼻をして居る人を見て、直ちにこれは酒を多く飲む結果であると判斷する人があるが、これは全く誤りであります。詩人のラングバインも「赤紫の彼の鼻は、酒の友とぞ知られける」などゝ歌ひましたが、これは間違いであります。

これは寧ろ、著しく低い氣温に由るのでありまして特に餘り寒くなくとも、濕冷い空氣が鼻、頰、耳などに中れば、その皮膚の細い血管は忽ち麻痺します。

而して初は先づ蒼白く視えるが、次で帶青赤色になる。それで最初は血液がなくなりますが、ここに暖かい處に急に移ればこゝに鬱血が起ります。凍傷のこの最初の時期に於きましては、種々の方法で以て血液の還流を促せば、組織に及ぼす處の害を去る事が出來ます。でありますから、暖かい室に這入まへ

には、雪で以て鼻や耳をよく擦するか、雪が無ければ、冷水で以て罨法すればよい譯であります。

尙ほ注意するならば、この凍傷に罹つた、手足などの部分を高くあげて、靜脈のいつまでも癈がつて居るのを防ぐやうに仕なければなりません。

この現象は、鼻に於て最も著しく現れまして、多少太い紫色の線がみとめられます。こゝには最早血液の循環は行れませんから、其部分は全く無益になりまして、かまはずに置けば、更に害となりますから、この場合には、治療を致さなければなりません、これは其の向きの醫者にかゝれば、電氣療法で以て、皮膚に傷をとゞめず、比較的容易に療治が出きます。

これは、やゝ進んだ場合でありますが、幸にこゝまで立至ることは餘り多くありません。大抵血管の方の變化は目に付かず、只一般に鼻の赤くなつて居るので知られます。この際多くは輕度の浮腫が現れますこれはどうして起るかと申ますと、寒さの爲に血管の壁が害されまして、血漿が周圍の組織に出て起るのであります。この場合にも、電氣療治は、比較的簡單に此の浮腫を去ることが出來ます。

以上申しました事は、手足に於きましても、同樣でありまして、その鬱血は、往々鼻や耳よりも更に甚だしい事があります。これは、どうしてか、申ますと、狹い手袋や、窮屈な靴で壓付られて居る部分に出來るのであります。

その結果はどうなるか申しますと、非常に氣持の惡い凍瘡が出來ます。即ち紫赤色になつて、非常に痒く、浮腫て、殊に其處を暖かに致しますと著しくなります。

而して等閑にして置けば、遂に破れてまゐります。

これに對しては、種々な藥りもありますが、格魯兒石灰で洗ひ、或は、格魯兒石灰軟膏がよく應用られて居ります。然し何時でも、殊に其部分が潰れて來ました時には、ぜひ醫者に診せなければなりません。

次に凍傷の、もう一ばい進んだ場合に就て御話しい

たしますれば、この時期になりまするご、水ぶくれが出來まして、中には帶黃赤色の水が溜ります。尙ほ一層ひどくなりますご、其部分の血液循環は、全く妨げられますから、其部分は腐つて參ります。こうなれば、最早外科醫者の御厄介にならねばなりません。

以上述べたる一部分の凍傷に罹るに、色々な御手傳をやるものがある。それは何かご云ふに、例へば、寒い風、弱い體質、貧血、老年、疲勞、榮養不良、殊に、泥醉、であります。これに由りますご、西洋婦人の覆面は、鼻や頰の凍傷を起すには便利であります。どうしてかご云ふに、この不要ざる皮膚の豫防道具は、その後で甚しく空氣の循環を妨げて、其の氣息が氷り附く、而して寒さよけには、勿論ならう筈もないのであります。

扨又長時間寒中に步きます時には、段々寒さの感覺を以て疲勞が起つて、それが益々甚しくなつてまゐります。手足は硬ばり、感じが無くなつて、氣息が苦しくなる、次で段々眠くなつて來て、ごてもその睡氣に打勝てぬやうになる。こゝで以て中樞神經系統、詳しく云へは、腦ご脊髓の中を走つて居る神經の道の麻痺が起れば、その人は遂に死の眠に陷いるご云ふことになるのであります。此時には、心臟の働が弱くなつて來て、脈は殆ど觸れないやうになり、呼吸も有るか無しの有様で、或は全く無くなつてしまう。而して手足は往々氷柱のやうに固く脆くなつて、下手に取扱へば、これを折るやうなことがあります。

斯様な場合に如何したら善いかご云ふに、先づ第一に血管や心臟の全く麻痺してしまふのを防ぐやうにしなければなりませんが、これは只極めて注意深く且つ徐々に行はなければならんのであります。乃はち氣を附けて衣服を脫がせ、それから先づ寒い室の內に於て、雪か若しくは冷水で以てよく摩擦し、而して刺戟性の嗅藥を用ひて目を醒させ、その上で冷たい咖啡、酒、或は葡萄酒などを少しづゝ呑ませま

す。手足を動かすには、關節の處は餘程注意をして動かさなければなりません。又心臟部を靜に叩き或は按摩し、人工呼吸法を施すことも必要でありますが、殊に近來は酸素の吸入法が大に賞用せられるやうになりました。斯樣にして段々室を暖め、飲物も温いものを與へ、若し出來るならば水浴をさせます。

兎に角此の場合に於て、最も大切な事は、此等の救助法を行ふに、凡て徐々にすることであります。若しこれを急劇に致します時は、今迄で縮込んで居つた血球が急に浮き出しで、腦や肺の血管を塞いで、その爲に忽ち死んでしまうやうな事になるからであります。

育兒

何故小兒が啼くか

嬰兒は、未だお父樣お母樣とも言へず、何が欲しいかにが欲しい、あゝしたい、かうしたいと言ふことも出來ません、只啼いて以てこれを告げるのであります。それで若し母親がその啼き方に注意するならば、餘程餘計な心配を省くことが出來ます。私は或お母さんが、其の嬰兒の啼くのを止めやうとして、頻りに撫搖ながら、啼が止まないと、頓狂な聲を出して「如何するど言ふのさ、如何しやうと言ふのさ」と言ひながら、生れて何月もたゝない嬰兒を、ぢれつたさうにひどく詰問してるのを見ましたが、これは嬰兒が啼くと、何でも五月蠅から止めやうとするのである。而して幼兒が何事かを欲するのであると云

ふことも推察して居るのであるが、それが果して何事を欲し、何事を訴へるのであるかと云ふことに就ては少しも考へないのであります。

概して嬰兒の不平さうに啼く時は、何處ぞ痛い所があるか、寢床の具合、又はその寢かされて居る體の位置が惡いか、暑すぎるか、寒むすぎるか、又は餘り強く衣服が纏きつけられて居るとか云ふのでありますが、どうかすると釦子、煎餅の片、甚しいのは針などが衣服の中に在て、それが絶えず刺戟するので啼くと云ふやうなこともあります。

幼兒の生れた時から、絶えず其兒に注意して居るお母さんなれば、その啼くのを見て、何が不足なのか。どうしたのかゞ直ぐ分かるのであります。尤も前に申上げた例の如く、幼兒は啼方に由て、その欲する所を訴へて居ても、母の不注意、或は考が足りなければ、矢張その意味を推測することも出來ず、亦子をつかまへて「どうするのさ」と、御自分のどうかしなければならぬ責任を詰問して、ぎつ〳〵をくはせる樣なことになります。

それで何人も心得て居らるべき事を、次に申上げて置かうと思ひます。

先づ二時間置き、或は三時間置きと云ふやうに、時間を正しく授乳なされたならば、幼兒は決して御腹が空いて泣くと云ふことはありません。此點からも、規則正しく乳を與へると云ふことは必要でありますさうでなければ、他に泣くべき原因があつても、先づ乳が欲しいのであらうと云ふので、無闇に乳房を哺ませて、消化を害する計りでなく、眞に泣くべき原因も、これで紛ぎらされて發見せずに居るやうなことになります。それで規則正しく乳を與へてあるのに泣き出すならば、これは何ぞ前に擧げた樣な原因があると云ふとに氣が付かなければなりません。

續けざまに泣く時は、何處かに絶えず疼痛があるのでありまして、往々其痛い處に手をやつて居ることがあります。又幼兒の體の位置で以て、疼痛のある所が分かることもあります。腹の痛い時には、脚を

上の方に縮めて啼く。御腹が平常よりも大きくなつて居て、絶えず烈しく泣く場合には、疝痛があるのであらうと推察されるのでありますが、此時には、食物を與へれば、暫時泣きが止みますけれども、忽ち復た一層烈しく泣き出します。

引續き泣き立てるのは、皮膚に炎症があるか、針が刺すか、ボタン、紐、或は強く締めた衣服の皺などが、よく原因となつて居る。

何かゞ口に觸れる時に泣くならば、そこに痛みがあるのである。懐く時に甚く泣き立てるならば、丁度其のつかまへて居る處に痛みがあるものと思はねばなりません。

非常に甚しく而も暫時泣き立てるのは、夢を見たのか、或は脳脊髄神經が障碍されて居る時であります。

咳をして直泣き立てるのは、其咳で以て痛みを起し、或は咽喉か腹に爛れて居る處か、或は小さな創があるのであります。

疲れて居つて、眠いので有るが、他の小兒の爲に、騷しいために、或はからだの位置が惡いために、眠いのを妨げられる時には、泣きながら目を擦るものであります。

泣き立てずに「ぐづる」時には、風を引いたとか、鼻や咽喉に痛い處があるのであります。

また餘り振つたり、搖つたり、懐いたり、抱へたり、すると、夫れが却て嫌であるとか、或は往々痛みを起して泣く事があります。

神經質のお母さんは、そのイラ〱したりヂレたりする爲に、これが傳染して、その小兒迄が神經質になる事があります。

苟も母たる者は、全國民の性情、否全世界の性情が小兒の教育に關係して居ると云ふことを考へねばなりません、斯く嚴粛にして、且つ重要なる責任を持つて居る小兒の養育と云ふ事より神聖なる務めはどこにありませうか、これこの地上に於ける最も大切なる事であつて然かも母たる者に信任されて居るのであります。

こども（承前）

前號では小兒と云ふものについて、大體のことをお話致しましたが、これを一ト口に言へば、小兒と云ふものは大變育てにくいものであつて、只身體だけを大きくしただけでは、小兒を育てる人の役目がすんだと云ふことは出來ないので、心の教育にも十分注意せねばならぬ、身體精神共に立派に出來上る樣に注意せねばならぬと云ふことを申たのであります、さて今度は、寒さの時分には、小兒にどんな注意をしてやらねばならぬかと云ふことに就てお話致しましよう。

日本の統計を見ますと、二月中に多い病氣は、發疹窒扶斯、痘瘡、麻疹、急性氣管枝加答兒、肺炎と云ふ準序になつてゐますが、この內で小兒に起る病氣と申せば、別にこれと云つて示摘することは出來ませんけれども、先づ肺炎、痘瘡、麻疹などは恐るべき病氣であります。併し今日では種痘法が確實に行はれてゐますから、痘瘡の憂はないと見ても差間へはありません、次ぎに麻疹は、小兒の內に必ず一度罹るものでありますから、これも大した恐るべき病氣ではありません、併しそれかと云つて、麻疹と云ふ病氣は決して、たちの良い病氣ではありません、極く輕るい麻疹ならば大抵一週間位ですむものでありますけれども、少したちの良くないものになると、麻疹が長引くだけでなく、これに引續いて、氣管枝加答兒などを起して來ることが度々あります、肺炎と云ふ病氣は小兒に取つては誠に恐るべき病氣であります。

その他にも色々の病氣が起ることがありますが、今日は以上申上げました、病氣について素人が、是非知つてゐなければならぬところだけを、簡單に御話致します。

麻疹

麻疹は、はしかとも申しまして、もし皆樣は疾に御承知の病氣であります、さてこの病氣は、起る少し

前から小兒の性質を變化させるものでありますから、このときに克く注意致しますと、恐るべき合併症や續發症などを豫防することが出來ます、まだこの病氣の原因に成る黴菌は判りませんが、この原因物が小兒の身體の内に侵入致ますと、小兒は始終不機嫌で、一寸したことでもすぐに泣いたり怒つたりして、夜は良く眠らないで、泣いて許りゐます、そして乳房を哺へさせても、乳を厭つて飲まず、時とすると下痢をしたり、または秘結して、大便が全く出なく成ることもあります、こんな樣なことが八九日位、長いときは二週間位續くことがあります、この時期が過ぎますと、今度は本當の病徴を顯はして參ります、その病徴は大變劇くて、眼が眞赤に成り、始終涙を出して、噴嚏や咳嗽などが、澤山に出まして、熱が出ます、頂度感冒の劇いものの樣であります、この時に小兒は頭痛や、寒戰を感じるのでありますけれども、極く小さい小兒では、頭痛がしたり寒戰がしたりすると云ふことは、云ひませんで、ひきつけることがありますから、こちらで克く氣を付けて、身體が冷へない樣にしてやらねばなりません。

この時に口を開けて良く檢査を致ますと、咽頭の扁桃腺と云つて、懸雍垂の兩側の處にある腺や、上口蓋などが、大變赤く成つて、頰粘膜や舌や口脣なども、同じ樣に赤く成つてゐて、ここにはコプリック氏斑と云ふものが出來てゐます、このコプリック氏斑と云ふものは、どんなものかと申ますと、青白い色の小さい斑點で、その周圍はほかの處よりは、一層赤味が濃く成つてゐます、この樣に眞赤の處に青白いものが出來るのでありますから、大抵は一寸見ればすぐ判ります、これに觸つて見ますと、少しばかり隆起してゐる樣であります、これは紐育のお醫者でコプリックと申す人が初めて見付け出したものでありますから、その人の名を付けて、かく申すのであります、その數はきまりはありませんけれどもまるで十二三から多いときは四五十以上も出ることがあります、併しこれを見るときには必ず晝間明る

い時でなければいけません、夜ランプの燈火で見ては見えないことが度々あります、以上申ました樣な風にして三四日過ぎますと、熱はだんだん高く成つて參りまして、咳嗽も劇しくなり、咳嗽をする度毎に、喉頭が痛むものですから、小さい小兒は、咳嗽をしたあとは、さもかなしそうに泣きます。そして麻疹に特異な疹が顯はれて參ります、先づ一等先きに出るのは顏であります、赤か又は少し黑味を帶びた赤の、小さな圓るい疹で、少し隆起してゐます、時とすると、これが澤山列んで半圓形に成つてゐることがあります、こんな疹が顏からだんだん下の方に擴がつて來て、頸、胸、上肢、胴、下肢と云ふ風に顯はれて來ます、そして二三日たつと顏に出來てゐた疹はだんだん、色が褪めて來て、其他の疹も赤色が消えて、遂にすつかり消えて了います、この間が本當の麻疹と申す病氣と云つて良いのであります、これがすむと今度は今迄疹の出來てゐた、皮膚が糠の樣に成つて、剝げて參ります、そして病氣が癒るのでありますが、併しこの時が大切のときでありまして、恐ろしい氣管枝加答兒と云ふ病氣が起ることが、度々あります。

この病氣は前にも申ました通り、誰でも一度は罹るものでありますが、大抵は一度罹れば二度と罹ることはないものであります、佛蘭西にフエロエと云ふ島がありますが、そこでは一度島の住民が、一人の水夫から麻疹を傳染されて、皆んな麻疹に罹つたことがありましたが、その後モー一人も麻疹患者を出したことがないと云ふことを、佛蘭西のパナンの云ふ醫者が報告してゐます、併し日本などでは、二度も三度も麻疹に罹つた人が、澤山ありますから、一度罹つたとて、決して安心は出來ません。この病原菌はまだ、發見せられませんから、何から傳染するのかは、十分に判りませんけれども、極く初めで小兒が只機嫌が惡るいと云ふだけのときでも、他の小兒に傳染させることがあります、それからまた、顏や手足に疹の出來た時分には勿論傳染するもので

ありますが、疹が消えて、皮膚が剝げる時分には、傳染性があるものか無いものか良く判りません。
痲疹と云ふ病氣は以上申上ました樣に、傳染する原因が判らないのでありますから、從つてこれを豫防することが困難であります、或人は、痲疹は危險な病氣じやないから、どうしても一度罹るものとすれば兄弟が一所に罹つて了つた方が、後の心配がなくなるから、餘程都合が良いなんて、兄弟の內で一人痲疹に罹つても、他の兄弟に少しも注意をしてやらない方があります、これは大變な心得違であります、痲疹そのものは、そんなに怖はい病氣ではありませんけれども、痲疹に罹ると色々の合併症を起しますから、これで小兒が死亡するのであります。今その合併症のことを少しばかり御話致します。
極く簡單なのは、熱であります、これは病氣ではありませんけれども、小兒は小さくて、痲疹が劇いときには、大變熱が高くなつて、熱のために小兒は殆れてしまいます。
最も多いのは氣管枝加答兒でありますが、これが氣管枝の極く細いものに傳播して、毛細氣管枝加答兒と云ふ病氣を起します、これに引き續いて、小兒の勁敵であるところの肺炎と云ふ病氣も起るのであります。
また結核は痲疹と同時に起ることが度々あります、併し極く小さい小兒ならば、結核が傳染したとは考へられませんから、これは結核の素因のある小兒に限ます。
小兒でも殊に身體の弱いもの、度々氣管枝加答兒に罹つたことのある小兒、心臟の弱い小兒、四歲か五歲位の小兒などには、別段に注意してやらないと、不慮の禍を見るに至るものであります。
それから若し不幸にして、兄弟が二人一度に痲疹に罹つたときは、これを決して一つの室に寢かしてはなりません、痲疹と云ふ病氣は、多くの患者が一所にゐると病毒が澤山出來るために、病氣を益々重くすることがあります、それ故痲疹の小兒はなるたけ

一人で寢かして置いた方が良いのでありますから、入院させるよりは、自分の内に置いて十分注意をした方が、安全であります。

治療のことを一寸申上ますが、麻疹そのものは、すぐ醫師に見せて適當の處置を受けなくてはなりませんが、その他に注意をすることは、若し小兒の兄弟があれば、それは病人のゐる室には決して近づけないこと、食事の器は全く別にして置くこと、病人の室は溫かで、風通りの良いところを選ぶこと、併し窓がすぐ外に面してゐる室は、室内の溫度が、變り易くありますから、いけません、室内の溫度は普通の寒暖計で十八度位が丁度良いのであります、而して時々病人を牀の上に坐らして、腦に充血することを避けることなどは必要の注意であります、その他食物や飲料のことは、克く醫師の言を守らねばなりません。

（以下次號）

生前教育の必要（承前）

ビヨルンソンが、自分の妻に就ての面白い話と云ふのは、先づこうである。

自分は、妻と一緒に汽車旅行をしたことがある。其際自分共の前に坐つて居た一人の男と知合になつて四方山の話を致したが、其男は耳に小さい瘤を持つて居たので妻は始終其瘤を見まい〱と勉めて居た實は妻は其當時懷姙して居たので、若しも自分の生む子が、あんな瘤を持つて産れたら、それこそ大變だと思つたからである。處が妻はこれが非常に氣になつたと見え遂に自分の腹の中の子は慥に其男の持つて居るような瘤があるとまで思つた。

自分共は、まだ妻が分娩せぬうちに外國に行つた。其所で又斜視の男が尋ねて來た、妻はこれを見て、又思つた、自分の小兒が、こんなであつたらどんなに不憫だらう、何だかあれに似た小兒が生れるように感せられて困ると申して居つた。

所が生れた小兒は、妻の想像に違はず斜視であつた。これは單に一つの例話であるが、如何に母の感化が大なるものであるかが分かる、況んや精神上のことは尙ほ更である。昔は胎教と申して姙娠中婦人の修養の重ずべきことを申しましたが、矢張かかる關係のあることを思つたからでせう。

希臘の詩人、アピアノスは、嘗て申したことがあります。スパルタの婦人は、立派な小兒を得んためにとて、アポローやヒヤキントースやナルキショスなどの像畫を寢室に置いたと云ふことである。

また有名な醫學者ガレヌスも言つたことがある、どうかして奇麗な小兒を得たいと懇望して、寢室にアドニスの像を掛けて、念じて居た夫婦は、遂に麗はしい小兒を得たと申すことである。

前述の如く、精神上の感化、極めて深大なるものの存すると云ふことは、當然のことであるが、ここに一つの例證をあげて見ると、モツアールトの母は、結婚後の一年と云ふものは、狂氣の樣になつて音樂を修めた結果、息子は有名な音樂家となつたが、後母の音樂を止めたる當時に生れた第二の息子は、音樂に對する天才は零であつたと云ふことである。

母の感化が生前に於ても、生後に於ても極めて大なることの證據には、英雄や、豪傑や、學者や、偉人のうちに、賢母を持てる人の多數あるを見てもわかる。

獨り懷姙中の感化のみではない、生後母が授乳する間の感化と云ふものは、實に著しいものである。哺育者の感化は斯かる、頑是なき時代に於て、不識の間に、小兒の胸に刻まれるのである。

若し小兒に乳を與へる際、無闇に怒つたりするような場合には、小兒は痙攣を起し、甚だしい場合にその爲め死んでしまふことすらある。

立派な小兒を得んとすれば、母親となる人がどうしても、それだけの用意をしなければならぬ、これには二つの道がある。

一つは、精神的にも、肉體的にも、絕えず修養をす

る事で、他の一つの方面は、身體に惡き影響を及ぼすものは、悉くこれを取去るように努めねばならぬことである。

母親は、啻單に乳や其他の食物を與へて小兒を育てるだけが、義務であると解釋すれば、それは大した誤りであります。

然り小兒の身體は、この食物によつて生長して參りませうけれども、同時に精神の食物を與へねば、肉に於て強くなるとも、精神は餓死してしまふ、されば母親となるものは、常に良き精神的榮養を與へることを忘れてはなりませぬ。

されば先づ母親たるものは、我が子に善良の精神榮養を容易に與へることの出來るように、我れ先づ教育を受けねばならぬ、卽ち我自ら我を教育せねばならぬ。

この目的を達するためには素より夫婦相和し、相扶け、相睦み、修養を一日も怠つてはならぬ。

人間が自ら修養を重ねて、徳を積み、品性を高尚にするのは、當然の義務である。人の一生は決して五十年や百年で、終りを告げるものでは無い、未來の我は、子孫を通して、永遠に殘るのである。

人間の目的は、向上發展を重ねて、國家社會を完全に仕樣と云ふのであるから、この文明を導くためには、努力が要る、理想の人間と云ふものは一朝一夕に出來るものでもなければ、又偶然に生れるものでも無い一個の自我が少しにても向上發展して殘るならば人間は進化の道を行きつゝあると云ふことが出來る。

家庭衛生

鼻感冒の療法

紀元節の前後、梅の花見の頃は、何人も能く鼻感冒で、嚔をしたり、涙を出したり、鼻を詰らしたり、

鼻液を垂らしたり、なか〳〵大變なことでありますが、これは只うるさい、多少氣持が惡い位のことで、さう大騷ぎするにも當らない、この位のことで醫者を訪ふにも及ばぬと、打捨てゝ置くことであります。實際これはありふれたことで、大抵かまはずに置いて、二三日或は一週間もすれば直つてしまいますが、醫者の所に行つて見ると、なか〳〵馬鹿になりません。この何でもないやうな鼻感冒が基で、鼻續きの大切な部分に炎症を起し、中耳炎など〻云ふ危險な耳の病氣にもなれば、咽喉から延いて、氣管、氣管枝、はては肺炎など〻、一命にも關はる病氣を惹起したものが、決して少なくないのであります。

なる程、さやうな病氣に罹つてはたまらんと云ふことは、誰も解りますが、然し鼻感冒の中は、矢張おつこうと云ふ譯でありませうか、兎角放置つておく

そこで手療治をお勸め致す譯ではありませんが、鼻感冒ぐらゐで醫者に行くのは、おつこうだと云ふ、所謂橫著な人の爲に、二三の鼻感冒療法を御紹介致します。

鼻感冒は、寒さの爲めに鼻の粘膜が冒されて、其處が充血して、腫れて、分泌が盛になつて來るのでありますが、これが進んで、其の續きの粘膜にも及んで行く。而してかやうに粘膜が害されて參りますと、今までは別段仇もし得なかつた無數の黴菌共が、時を得顏に跋扈して、種々な病氣を起すのでありますでありますから、此等の惡者共が、巢を造つたり、城を構へたりせぬ中に、これを退治することが必要であります。

それには先づ次の樣な處方が賞用されて居ります。乃ちメントールとカンフルを四と二の割合に混ぜたものを吸入するのでありますが、これは試驗管とか壜とかに、沸騰た湯を入れて、それに今のメントール即ち薄荷腦と、カンフルを混ぜたものを一二滴入れて、一日數回、五分乃至十分間宛吸入する、殊に鼻で嗅ぐのであります。

第二には、薄荷油二「グラム」、アルコール一八「グ

ラム」、水八〇「グラム」と云ふ割合に調合する。これも前と同様にして吸入するのであります。どちらも簡單で、能くきゝます。

次に鼻感冒の始に發汗療法をやれば、これも效能があります。但し湯に入つて汗を取るのは、自宅で以て尚ほ蒸汽で發汗させる裝置でもなければ、失敗しますから、それよりも先づ〇・七乃至一・〇「グラム」のアスピリンを服んで、温かい茶を澤山飲んで寢るがよからうと思ふ。

又有名なカル、スバードのドクトルでレーウイと云ふ人は、鼻感冒の時は、兎に角勉めて鼻で呼吸せよ、さうすれば、鼻粘膜の腫脹が早く去つて、鼻の通りがよくなると云ふて居りますが、これは元來鼻感冒を起させぬ方法でもあり、感冒性の加答兒や、氣道の深い炎症を防ぐ方法にもならうと思はれます。尚ほ注意すべきことは、鼻感冒に罹つて居る時は、なるべく話をせぬやうにすることであります。又天氣の悪い時に外で仕事をしてはならぬ。此等は自然口で以て呼吸しなければならぬ様になるからであります。

其他種々の塗布藥、吸入藥、含嗽劑なども用ひられますが、それは醫者に依らなければなりません。以上申上げたことも、健康な大人が、一寸鼻感冒に罹つた時の心得に過ぎませんから、これで以て小兒などの感冒を平氣で取扱かはれては困ります。

家庭に備付くべき醫療品（承前）

醫療品の内前回には主として治療用の物品を述べたが、今回は藥劑を列記して見やう、茲に記すものは極く普通の藥ばかりで毒藥や劇藥の如きものは、世人の手にも入り難く、誤を來す事も多いから、よく知れわたつた藥劑の外は入れぬ事にした。併し藥と云ふものは水藥にしても散藥にしても外見だけでは甚だ間違い易いものであるから、多少の藥品を備附けやうとする家庭では十分に注意して混用誤用の起

らぬ樣にせねばならぬ。其爲には如何に親しく自分の知れる藥にも、如何に害の無き少量の藥にも必ず藥名を附記して置かねばならぬ。一包の散藥にも必ず其包紙に誰にでも讀める日本字で明記して置かねばならぬ。又都合で劇藥や毒藥を貯へる樣な事があらば、全く戸棚を別にして決して他の藥と混同してはならぬ。

一、吐根末

此藥の用法は廣い、氣管支加答兒や肺結核の如き、少し宛粘り強い痰の出る病氣に袪痰劑として用ひ、又止瀉劑として、赤痢とか其他の下痢症にも用ふるものであるが。家庭の定備品として特に揭げた理由は今一つの用法にある、即ち吐劑としてゝある。吐劑を用ゐて胃の中に入つた物を吐き出さねばならぬ必要は度々起る事であるが、殊に必要なのは中毒の時である、中毒には藥劑の爲め中毒もあり、魚獸の肉によるもあり、茸類等に中る事もある。藥劑の中毒にもモルヒ子や砒石の如き劇しい毒藥もあり、硝酸鹽酸硫酸の如き強き酸類もあり、アンモニヤとか苛性加里の如きアルカリ類もあるから從て其解毒の方法にも種々あつて、アルカリ類ならば酸を吞ますとか酸類の毒ならばアルカリを與へるとか、又は牛乳や鷄卵をやるとか其他色々あるが、之等は胃の中の毒物を中和さして其毒力を弱くすると云ふ目的であつて、之れも必要には相違無いが、夫れよりも手輕な方法としては、胃の中に入つた毒物を吐き出して仕舞へばよいのである。應急手當として先づ吐き出して仕舞つて其後は醫者の手に托してもよい。何の毒には何を與へるかと考へたり準備したりして居る間に本人が死んでしまつては何にもならぬ。扨て吐出する爲には口中に指を入れるもよからう、微溫湯を與へるもよからう、だが之れだけで安心しては居られぬ、之れで出ぬ時の爲に吐劑は是非貯へて置かねばならぬ。吐劑にも種々の藥があるが吐根末が最も普通である、吐根末を一瓦宛一包と爲し置きて中毒の時には直に其一包を飲ませる、一包で吐かず

ば十分か十五分の後に又一包、之れでも出ずば又一包を與へる、大抵二三包を與ふれば吐き出すものである。

一、亞鉛華澱粉

之れは夏日「あせも」の出來た時には家庭で常に用ひて居る藥品である、「あせも」に限らず濕疹や「かぶれ」其他小さな「ふきでもの」に撒布するには之れに限る、殊に小兒には顔面や頭部其他に濕疹の出來る事は甚だ多いのであつて、小兒の多い家庭等では亞鉛華澱粉の需用は絶へる事はあるまい、之れを撒布して置けば該部に刺戟を少くし、疹を乾燥さすから治癒が早いのである、序ながら世人は濕疹の如きは清潔にすればよいと云ふので毎日湯水を以て洗ひ、時には又石鹸を以て洗ふ事すらあるが、之れは大なる誤である、濕疹を洗ふ事は禁物である、成べく刺戟を避けねばならぬ。濕疹に限らず又火傷をして紅く成つた皮膚に撒布するにも適當である。

一、ピクリン酸

火傷の藥にはピクリン酸が最もよい、之れは黄色の結晶で、冷水には十分溶けぬから熱湯で溶かして二百倍か五百倍位の液にして置て用ひるのである。只皮膚が紅く成つただけの火傷ならば此液を塗布して置けばよい、又一層火傷の度が強くて水ぶくれに成つたり、表皮が剝離したりした樣な時には此液をガーゼか何かに浸して罨法すればよい。

一、硼酸

之れは眞珠樣の光澤のある無色小葉狀の結晶であつて、水にも溶けるけれど熱湯の方がよく溶ける、熱湯に溶かして、百倍、五十倍、三十倍、二十五倍等の液を用ひる。之れは實に便利な應用の廣い藥劑で、第一に制腐劑として創傷等に用ひて刺戟性が少なく中毒を起す樣な患は無いから、洗滌にも用ひ濕ほすにも拭ふにも用ひ、創傷に限らず眼、耳、尿道、膀胱、胃等の洗滌にも最も適當である、斯く有效無害なものであるから、家庭に於て素人が創傷や耳目等を洗つたり拭つたりするには、最も適當のものとし

て勧めねばならぬ、次に述ぶる石炭酸や昇汞の様なものは素人には危険の事がある。其他又罨法料としても大に必要である、一寸眼の痛い時にも、手足の腫れた時にでも之れをガーゼに浸して罨法すればよい。其液の稀釋度は普通五十倍から三十倍位ならばよいが精密に云へば、創面を洗滌するには三十倍、胃や膀胱を洗ふには百倍から三十倍、洗眼料又は口中を含嗽するには五十倍から二十五倍位と定められて居る。又硼酸を水に溶かさずに末として創に撒布してもよい。

一、硼酸軟膏

一寸して淺表なる創面、糜爛したる皮膚表面、濕疹の様なもので、撒布藥ではうまく乾燥しさうにも無く、ガーゼを貼用して置いては創面に附着して取れ難く成つて困ると云ふ様な場合には、軟膏が必要である、軟膏にも種々あつて、夫々其用法を異にして居るが、素人の用ふるには硼酸軟膏が最も都合がよい、如何なる時に用ひても安心で、害が無くて、功が多い。

一、石炭酸水

石炭酸と云ふものは元來は無色の結晶であつて、之れを水に溶かして消毒用に使用するのである。二十倍から百倍位迄種々の濃度のものが用ひられる。例へば罨法する様な時には百倍、手を洗つたり創面を消毒したり器械を消毒したりするには五十倍、大小便とか嘔吐物とか喀痰とか其他傳染病毒を有するものを消毒するには二十倍位の物を用ひる。併し石炭酸は中毒を起し易いから成べく直接創面には用ひぬがよい、又目の中や口中を洗ふには用ひてはならぬ、此爲には前記の硼酸水を用ひる様にすればよい。石炭酸で中毒を起せば黒い尿が出る様になる、手を洗つたり其他の消毒用に用ふるには差支無い。

一、昇汞水

昇汞水は消毒用に用ふるには便利なもので、其功力も甚だ強いのであるが、之れは毒藥であるから一寸素人の手には入り難い、手に入るにしても濃きもの

は素人の手にするは危險である。元來之れは白色の結晶であつて、外用に用ふるのは其千倍から五千倍位の溶液である。醫者の用ひて居る昇汞水を見ると淡紅色を帶びて居るが、之れは實際の色では無い、昇汞水の溶液は無色のものであるけれど、毒藥であるから誤て用ひては惡いから、其中へ「フクシン」と云ふ染料を入れて色をつけてあるのである。

一、アンモニア水

之れは氣附藥である。無色透明揮發性の液體であるが、一種特別の劇しい臭氣があるので、其爲に此臭氣で鼻の粘膜を刺戟して呼吸作用を行はすのである故に失神した者、假死の狀にある者、歇斯的里の發作を起した者等に鼻腔に此罎の口を近づけてやれば、其刺戟で呼吸を爲さしむるのである。又アンモニヤは強いアルカリ性の藥劑であるから、前述べた酸中毒の時には之れを水にて稀釋して與ふれば、胃の中で酸と「アルカリ」とが中和作用を成して無害のものとなるのである。又アンモニヤは蟲に螫されたり蛇に咬まれたりした時には甚だ有功である、螫傷部を此液のうすいので洗ふか又は罨法してもよい。時には此液を靜脈內に注射する事もある。

一、アンチピリン

誰も知つて居る解熱劑である。併し解熱にのみ功が有るのでは無い、僂麻質斯に用ひて痛を止めるにもよく、其他頭痛だの腰が痛いの神經痛だのと凡て鎭痛劑として奏效する、分量は一回に〇・五から一瓦一日に一瓦から二瓦位である、だから〇・五瓦を一包として置けばよい。アンチピリンの代用として同じ樣な藥は澤山ある。アスピリンだのフェナセチンだのピラミドンだのと種々ある、其分量も大略同量位でよい、只ピラミドンはアンチピリンの三分の一量を用ふる事となつて居る。奏效は何れも兄弟の間にあるのである。

一、酒精

アルコホルも亦貯へて置いてよい。稀釋して內服として、虛脫、失神等の時に氣附藥として服用さす、

又外用としては瘭疽とか淋巴管炎とか其他の腫れ物に消炎の目的で酒精をガーゼに浸して卷き其上を不透物質で被包して置くもよい。又寢汗をかく人其他汗の多い人等では酒精を以て拭ふてやるのもよい。又酒精は殺菌の力を持つて居るから手や器械の消毒に用いてもよい、但し殺菌力は餘り濃厚な酒精よりは却て五十プロセントか六十プロセント位の稀釋度のものが殺菌力が強い。斯かる藥用の他にも酒精の應用は極めて廣いのである。

一、重炭酸ナトリウム●●●●●●●

單に重曹と云ひ炭酸と云はれて居る健胃劑である。併し家庭では胃の藥としてよりも煮物用として用ふる方が多い樣である。

一、苦味丁幾●●●

之れも健胃劑である。胃の病に人は重曹と共によく知つて居る、醫者の水藥の處方を見ると多くは苦味丁幾を入れてある、苦味丁幾は之れ程何にでもきく藥かと思ふかも知れんが左樣では無い、藥劑の爲に胃を損ふ事を恐れて、胃の藥を混じて服用するのである。

一、ベルツ氏液●●●●

顏や手足のあれ、ひび、あかぎれ等に用ひる、殊に冬向は手や顏があれ易いから、湯上りや水を使つた後で之れをつけて置けばよい、之れは藥店で知つて居るが、

苛性カリ	○・五
アルコール	四〇・〇
グリセリン	四〇・〇
水	六〇・〇

を混じたものである。此他に何か芳い香のある藥を混じてもよい。

一、ヨード丁幾●●●●

ヨチユムチンキとも云ふ種々の腫れ物に塗つてちらす藥である。誰でも知つて居る。其他種々の藥劑を記せば果の無い事であるが、あまり專門的の藥を多く記しては却て手療治に流れる樣

な事に成つても困るから、此處には只是非無くてならぬ藥のみに止めやう。

長命法（承前）

前にはブース大將の飲食に就いて、大體を御紹介致しましたが、この養生法を醫學上から、說明して見ますと、却々多大の意味を持つてゐることが判ります、あの簡單な三ケ條の内に、遠大の教訓を含んでゐることがわかりまして、なるほどと肯くことが澤山あります、併しまだこの後に澤山御紹介致しますから、重復を避ける爲めに、すつかりすんでから、醫學的の批評を致すことに致しまして、引き續き色〻の方の飲食に就ての御注意書を譯出致しませう。

トーマス、ハーヂー

トーマス、ハーヂーは千八百四十年の生れで、本年滿七十歲であります、この方は英國の小說家でありますが、英國の小說家で一番老年であるのは、この方ではなくて、チヨージ、メリヂスと云ふ人で、第二番が、すなはちこのハーヂー先生であります、而して本業は小說家でありますけれども、詩人であつて同時に哲學者であると云ふので大變名高い人であります、ドーセット洲で生れて、初めは建築家に成る志望でありましたけれども、天性文筆に巧者であつて、屢〻小學校の先生たちを驚かしてゐました、その内にトウ〳〵小說を書き始めて、遂に今日では有名の小說家と成られたのであります、しかし小說家として活動したのは、十九世紀の末葉でありまして、近頃は、全く小說を書くことを、止めて專ら詩の方に研究の方針を向けられたと云ふことであります、それ故近頃は詩ばかり公にして居られます、今日でもドーセット洲のマツクス、ゲートに居を定めて、補養として自轉車で方々遊び廻つたりして居られるそうであります、この方の手紙は甚だ簡單でありますが、一寸譯して見れば

(一) 食物　餘り動物性の食物を用ひません。
(二) 飲料　極く少しばかり酒を飲みます。
(三) 喫煙　全くやりません。

ロード、レイレイフ

千八百四十二年の生れで、本年六十八歳であります、この方の名は、化學を御學びになつた方は皆御承知のはずであります、すなはち有名の物理學者で「アルゴン」の發見者であります、この方の手紙も甚だ簡單であります。

(一) 食物　どちらかと言へば、動物性食物の方を減じます。
(二) 飲料　規則として毎日少し宛の酒を飲ます。茶は極く吟味して、少し宛用ひます。
(三) 喫煙　全くやりません。

サー、ラツク、ファイルルズ

ファイルルズは千八百四十四年の生れで、本年六十六歳の畫家であります、殊に肖像畫が上手で、英國の王樣の御肖像を繪いたことがありましたが、それが大變良く出來たために、今ではエトワード朝の肖像畫家としては英國では誰れ知らぬ人はないと云ふ程であります、目下の住所はケンシングトンのメルバリー町十一番地であります、而して手紙は次の樣であります。

(一) 食物　私は甚だ簡單であるけれども規則正しく、食養生をして居ます、常に心掛けて居ることは當然必要だけの食物を食べて、それ以上には決して食物を取らない樣にすることであります、若しこの規則を守らないと、食べたものは、身體の滋養にならないで、却つて害になります、而して當然の必要とか、これだけは食べねばならぬとか又何を食べたら良いかと云ふ樣なことは醫師について尋ぬるよりは人々が自分の性質、職業、身體の有樣、年齡等を考へて、自分で定めた方が餘程良いのであります、世の

中に立派な金言と云ふ様なものは、只口に言ふばかりで、人は餘りこれを實行致すものでありません、それ故むつかしい、規則など拵へないで、只自分の身體に適當するだけのものを食べるのが、一番良いことゝ思ひます。

(二)飲料　興奮劑として、時々晝食前に酒を用ひます、夕食の時は必ず用ふることにして居ますが、これも極く輕るい獨逸産の、赤酒か又は「ウイスキー」に水を割つたものであります、その酒類は、只宴會のときだけ飲ますけれども、その外のときに飲む様な事は全くありません。

(三)喫煙　身體が暇のときは喫煙を致します、而して可なり澤山用ひます、しかし業務に從事してるときは用ひません。これも喫まないのでなく喫めないので、若し喫めれば、矢張喫む方が良いのであります、この様に酒も飲み煙草も喫みますけれでも、まだ一度もこれが身體の害になつた例と思つたことはありません、それ故酒や煙草の害については私は一度も考へたことはないのであります。

ドクトルジー、グレース

ドクトルグレースは千八百四十八年の生れで、本年六十二歳でありますが、英國で十九世紀後半期の國中第一の「クリケット」妙手と云へば、たれでもグレースの名を第一に叫ぶと云ふ程の有名な人であります、その外銃獵が大變好きであるさうです、今から二十年前までは、ブリストールで開業して居ましたが、目下はサイテンハムのローリー、ハーク町七番地に住居して居られます、その手紙は

(一)食物　適度に食事を致します。

(二)飲料　これも適度にやります、酒も飲みます。

(三)喫煙　少しも用ひません。

ベンジヤミン、キツド

キツド先生は有名の哲學者でありますが、千八百五

十八年の生れで、本年五十二歳まだ却々若くあります、この人の手紙は非常に奇拔であります。
吾々の樣に、始終腦を勞からす人は、大變不養生をすることがありますから、これを飲食上の模範とすると、大變な誤謬を惹き起すことがあります、智力を非常につかふ人は、身體の方はあまり良くないのが常であります、私の經驗に依ると極端に智能を疲勞させると、心が大變澄んで來て、種々の良い理想が湧いて來て、その出來上つた、仕事は、他の人が一生懸命に成つて仕上げたのと全く同じ樣な好成績を顯はすことがあります、これは一寸考へると、ありそうでもないことでありますけれども、私の說明は斯うであります、智能を疲勞させたために生じた毒物は、一程度を過ぎると今度は腦を刺戟するのであります、それ故立派な大發見などは、をもに夜間に出來上ることなども容易に理解することが出來るのであります、さて私が日常行つてゐる養生法は次の樣であります。

(一) 食物　良く料理した、さつぱりした食物を好きます、つまり消化し易いのが良いのであります、そうすれば、いくらでも腦をはたらかせることが出來ますけれども、餘りコッテリした食物を取りますと、腦が朦朧していけません、私に取つては、どつちかと云へば小食の方が、腦が爽かに成つて、大變都合が良いと思ひます。

(二) 飲料　酒を飲むことは、あまりありません。酒を飲むだあとは、少しも勉强が出來ません、併しこれはすぐ斯うなるのでありませんで酒を飲んで暫時經つと、腦の力が衰へて來る樣に思はれます。

(三) 喫煙　時々やります。

プロフエッソール　エッチ、セイス

千八百九十一年以來英國オックスフォールド大學のアッシリヤ學の敎授であります、千八百四十六年の生れで、本年六十四歲であります、而してアッシリ

ヤ、バビロニヤの學問や、種々の文學上のことや、埃及、ヘブリユー等のことに關する著述は隨分澤山あります、古文學者としては、世界の泰斗であります、その手紙は次の通りであります。

(一)食物　適當の食物を少量宛食べて、夕食には滋養に富んだ食事を取ります、肉食は餘り必要なものでありませんと思ひますから、私は多くこれを用ひません。

(二)飲料　輕るい獨逸赤酒か又は佛蘭西赤酒を極く少し用ひます、朝餐のときは茶より咖啡の方を好みます、而して濃い茶は好みません。

(三)喫煙　少しもやりません。

(以下次號)



問●子供のヤブニラミは、防ぐ法が無いものでせうか、又一體なほせるものでせうか。

地方の一會員

答●小兒の輕度の斜視は、簡單な方法で防ぐことが出來ます。小兒は通常たゞ近い處を視なければならぬやうにされて居りますと、斜視を起しますが、遠方を視るときは、少しも斜視は認められません。先づ近い物を視て居る時に、その斜視を起して居る眼を遮ぎつて御覧なさい、さうすれば、其眼は平常の位置に復して、あたりまへに運動致します。つまりこれを應用して久しく、場合に依ては一週間或は一月も續けて、眼をさういふふうに慣らすのであります。これで斜視が治ります。それで小

兒が物を食べる時、本を讀む時、又は繪草紙などを見る時には、その斜視を起す方の眼を、全く塞いでしまふ樣にし、長い間この方　を守るのであります。尤もこれは前に申上げた通り、輕度の斜視の場合でありまして、烈しいものは、是非眼科醫に依賴しなければなりません、専門家は簡單な手術で以て能くこれをなほします。

問● 私は左の腮の處に、ホクロが有つて、これに毛が生えて誠に醜いのですが、これは取ることが出來ませうか、又取ても害が無いでせうか。

會員 某女

答● それは除去ぬこともありません。醫者の所に行けば、一二日藥液を塗布て取つてもらへるでせう。併しどうかすると、其處に黑い痕が遺つて、餘り成積の良くないことが往々あります。下手なお化粧は爲ない方が增です。母斑は少し見馴た人には、愛敬があつて好いものです、下卑なども、定めし結構な相だから、大切になさいと申すことでありませう。それは先づ戯談として、眞面目に申しても、他の理由から、餘りこれを取ることは、お勸が出來ません。これまでの經驗に依りますと、元來母斑のある所には、惡性の腫瘍がよく出來ることがありまして、それは恐らく刺戟の結果であらうと云ふことでありますから、まづ／＼これは大切にして置いた方が善からうと思ひます。

問● 私は、何もかも、家事上の事を一人でやるやうになつてから、身體の具合は、誠に宜敷いのでありますが、お臺所の仕事の爲か、近頃ひどく手が赤くなつて醜いですが、これに何か良い方法が御座いますまいか。

會員 某

答● 仰せらるゝ通り、手の赤いのは、家事家政に御勉強なさる、立派な標徴と存せられます。併し又御婦人方では、手の白いと云ふことは、餘程大事なことゝ思はれますから、仕事をして、手の赤くならぬ方法を申し上げませう。それには、ベンチ

ンに浸したガーゼを、毎週初の四日間は、朝十分間づゝ手に纏きつけ、次の日はベンチンに浸した布で以て手を拭くのであります。而してベンチンは脂肪を取つて手を荒しますから、晩はラノリンを塗つて置くやうに致します。但しベンチンは非常に火を引き易いものでありますから、此點には特に注意なさらなければなりません。斯樣にして手の赤いのが治癒りましたならば、其後は毎日ベンチンに浸した布で只拭いて、晩にはラノリンを塗つて、尙ほ清潔な手袋をはめてお置きになれば、手の赤くなるのを防げます。

問● 輕い胃加答兒のやうな傾のある時には、少しづつ度々食事した方が善いのでせうか、矢張三度宛戴いた方が善いのでせうか。

會員　糸子

答● それは無論、少量定數回に、食餌を取つた方が善いのです。但しそれも正しく三時間なり四時間なり間を置いて、滿腹せぬ中に箸を措くやうにし、凡て酸いもの、刺戟するもの、藥味、腹の膨れる樣なものは食べず、又熱いものや冷たい物も食べぬ樣にしなければなりません。

問● 脂肪で肥り過ぎて居る所に、カンフル軟膏或はカンフル丁幾を塗れば效があると聞きましたが、ほんとでせうか、又別に害が無いものでせうか。

某　會員

答● カンフルの局部的脂肪集積に效があることは事實です、併し軟膏でも丁幾でも效能に大差はない樣です、又粉末そのまゝでも效力があります。而して別に有害な副作用もないやうですから、何處ぞ脂肪が著き過ぎて不都合な場合には、他に特別の病氣を持て居られぬ限りは、外用して差支ありません。

問● 體量を增すにはどういふ方法を取ればよいでせう。

東京　筆子

答● この目的には所謂肥胖療法を行ひます。乃はち

先づなるべく安静にして、身體を使はず、出來るだけ力の儉約をする樣にし、體重を増すに有力な、消化し易い食物を採るのですが、これには牛乳、野菜、粉類などの食物を用ひ、固形の物と流動性の物を同時に攝取させます。尤も肥胖療法の獻立や方法の詳細なことは、其場合、其人の狀態に由て醫者が監督しなければ、完全には參りません。

雑報



○皇后陛下の御仁德

いはまくも畏こきことながら我が國母陛下には、寒さの砌、薄命の孤兒、不幸の患者までも思召もらさせ給はず深く御憐愍の餘り、去月十三日には、日本赤十字社長松方侯、東京慈惠會長德川公、福田會長二條公に對し、左の如く恩賜の御沙汰ありしとかや。

日本赤十字社救護患者へ
一木綿地雙子縞裏地共　六十二反
一金四十二圓　右裁縫料

東京慈惠院收容患者へ
一木綿地雙子縞裏地共　百二十反
一金八十四圓　右裁縫料

福田會育兒院兒童へ
一木綿地雙子縞裏地共　百二十一反
一金八十四圓七十錢　右裁縫料

○赤十字社救護所

日本赤十字社東京支部にては、日本橋區本石町三ノ六に救護所を新設し、不時の傷痍者に對し、無料應急手當を施すの設備をなせり。

○保姆に關する勅令

幼稚園保姆に關する勅令は昨年の末公布せられたるが其大要は左の如し。

第一　師範學校官制改正

從來師範學校官制中には保姆の名目無かりしが今

囘之を加ふる事と爲したるものにて師範學校に幼稚園を附設したる場合には附屬小學校主事をして之を管掌せしむ。

第二　公立學校職員俸給令中改正

從來保姆は官制中に無く從て俸給令中に無かりしが今囘之れを加ふる事となり師範學校の部に保姆を加へ訓導と同様の待遇と爲せり。

第三　師範學校に勤務する保姆の待遇を定む

從來保姆の雇と同等なりしを今囘之れを判任文官待遇と改正せり。

以上の三勅令は師範學校附屬の幼稚園に適用す。

第四　市町村立幼稚園の園長及び保姆の待遇を定む

小學校本科正教員の資格を有する市町村立幼稚園園長及び保姆の判任文官と同一の待遇を受くる事右勅令は小學校の附設たる市町村立の單獨設立に係るものに適用す。

○視學要項

文部省に於ては、大に學校敎育の内容を改善せんが爲に、各視學官を督勵し、敎育の實際に立入り視察せしめんとて、豫て視學官視學綱要なるものを規定せしが、更に（一）學校施設の狀況、（二）學校建築の方法、（三）學校衞生に關する事項、（四）敎授訓育の内容、（五）職員の倦怠、其他詳細に亘りて視察を遂げしむることゝなれりと、我國の敎育に於ても、益ゝ衞生上に關する事項に重きを置くに至るは慶賀すべきことゝ謂ふべし。

○解熱藥中毒

醫師に依て多く使用さるゝ藥劑は、自然民間にまで濫用せらるゝものなるが、アンチピリン、アンチフエブリン、フエナセチン等もこの例に漏れず、始め解熱劑として世に出て、廣く僂麻質斯、其他の神經痛に應用せられ、又流行性感冒の特效藥として俗間に知らるゝに至れるが、右の藥品は、何れも多少の副作用を呈し、これを濫用するに至りては其害尠からず、米國に於ても俗間隨意の服用者に其中毒頗る多く、甚だしきは爲に死亡せるも少からず、近時其

調査せる所に據れば、アンチフエブリの中毒最も多く六百十四件、アンチピリン百五、フエナセチン九十六件の實例を得たりと云ふ。

大日本婦人衛生會記事

○本會新年會

一月十五日午後二時より女子職業學校に於て新年會を催す、此日雪降り寒氣甚しかりしも、本年始めての會合のことゝて會員堂に滿ち、相互の禮ありて後、眞龍齋貞水が得意の講談に興をそへ、談笑數刻、各自歡を盡して散會せるは四時半頃なりき、當日出席ありし役員は左の如し。

濱尾作子　鳩山春子　長谷川仲子
三浦敎子　岡田德子　羽田三緒子
高木鐐子　田村喜代子　高橋幸子

○新潟支會新年會

新潟支會は、一月六日午後一時より新潟市高等小學校に於て婦人敎育會及び帝國婦人協會新潟支會と聯合の上、新年會を開催し出席者約百名許、最初高田せん子の開會の挨拶あり、次に來賓の祝辭及び餘興ありて頗る盛會なりき。

○山形支會新年會

同支會にては、一月六日午後四時より、縣會議事堂に於て、當市篤志看護婦人會、愛國婦人會と合同にて新年會を催し、百餘名の出席者ありて頗る盛會なりしが、一同夜間撮影をなし、各着席、先づ佐柳夫人三會を代表して開會の辭を述べられ、次で馬淵知事の祝辭あり、福引等の餘興もありて、各歡を盡して散會せしは午後八時頃なりし、尚來賓としては、馬淵知事、佐柳、澤田の兩事務官、萩警務長、西山女學校長及び講師の諸氏なりき。

○本會例會

去る二月五日午後一時半より神田一ツ橋通り女子職業學校內に於て例會を開き、ドクトル福井虎次郎氏は齒牙衞生上の二三の注意と題し、齒牙の健否と榮養上の關係を說き、齒牙の養生法に就き注意すべき

諸項を舉げて簡明に說明せられ、齒の衛生てふ小冊子とモデル齒刷とを會員一同に頒與されたり、次に醫學士河島右一氏は、月經の話てふ題にて、月經の生理的性情より妊娠との關係、その遲速、各年齡に伴ふべき變狀より病的の變化に至るまで、極めて平易にして、興味多き說明を與へられ、尙ほ實際上月經に關して何人も心得べき諸般の注意と希望とを述べられ、孰れも有益なる講演なりき。右了て別室に於て茶菓を供し、暫時歡談の後散會せるは四時過なりしが、當日の出席會員姓名は左の如し。

濱尾副會長　田村喜代子　岡田德子
鍋島會長　鳩山春子　石川貞子
高木鐐子　岸澄子　三浦敦子
（以上出席順）

○本會入會者

○羽田幹事紹介
●赤坂區一ツ木町七二　特別會員　川島京子

○前川照子紹介
●神戶市山本通五丁目七二ノ二塲淺方　通常會員　中田定代子

○事務所申込
●廣島市竹屋町六四渡邊方　通常會員　小貫しく子

○鳩山幹事紹介
●麻布區新龍土町十二　特別會員　內田陽子

○岡田幹事紹介
●牛込區市ケ谷加賀町一ノ十八　特別會員　松井きい子

○莊司氏紹介
●愛知縣碧海郡刈谷　通常會員　板倉はま子
●宮城縣加美郡小野田村字月崎　通常會員　宍戶きみよ子
●沖繩縣那覇立井病院內　通常會員　山川うた子

○橫井忠國氏紹介
●豐橋市莊雅橋衛官舍　通常會員　竹中梅子

○宇都宮支會

○中山支會長紹介
●　特別會員　鮫島房子
●　特別會員　蠣崎筱子
●　特別會員　齋藤さく子
●　特別會員　吉江武子
●　特別會員　岩滿いね子

○資格變更
●通常ヨリ特別へ　野呂梅子

○轉居

●府下荏原郡入新井村不入斗三四六へ　中野かよ子
●兵庫縣武庫郡住吉村九〇へ　野口眞子
●青森縣大湊要港部官舍へ　上泉久子
●府下荏原郡入新井村字山王山下方へ　石川すみ子
●岡山市南方町五五八へ　角田常子
●甲府市櫻町六五へ　川上きん子
●府下淀橋町柏木九六一へ　向山靜子
●神田區淡路町二ノ九宮本方へ　丹治春子
●府下豐多摩郡下澁谷伊達跡一八二五へ　服部繁子
●府下豐多摩郡中澁谷三〇九へ　曾根しん子

新案特許一〇三六二號
衛生的なる改良かもじ發賣



本品の特長

一、根元にコロップを裝置せるにより舊式のもの〻如く硬からず膚ざわり軟らかなり

二、皮膚を摩擦する事少きゆゑ頭のはげる憂なし

三、頭痛癖ある婦人にも用ひて爽快を覺えしむ

四、二百度の熱蒸氣にて消毒しあれば毛髮の傳染病を媒介する憂なし

丸髷	金十五錢より金七十五錢迄
島田髷	金三十錢より金壹圓五十錢迄
銀杏髷	金二十錢より金六十錢迄
送料	各八錢

◎諸かもじ製造販賣

東京市神田區富島町十七番地
【振替貯金口座一八一八八番】
田中金三郎

◎小賣特約店

京橋南傳馬町 大西白牡丹
本郷三丁目 兼康
淺草駒形 百助
淺草駒形 紅勘
神田區須田町 三井屋
日本橋通二丁 柳屋

特約店

神田區橋本町三丁目 勝本治助
日本橋區田所町廿一 山三商店
同 横山町一丁目 安井治太郎
同 馬喰町三丁目 萬新商店
日本橋區若松町 松葉屋紋太郎
同 横山町一丁目 天野源七
同 馬喰町三丁目 阿部錠
同 橘町四丁目 角島村商店
日本橋馬喰町二丁目 飛川商店
同 横山町二丁目 江川小間物店
同 横山町二丁目 森本支店
外全國到る所の小間物店にあり

タカヂアスターゼ

●消化不良に就て熊本醫學專門學校長谷口博士は曰く、澱粉不消化の徴候たる胃の脹大疼痛、溜飲、腸内瓦斯蓄積、便秘、前頭部疼痛及下痢を生じ營養不充分なるが爲め筋肉及體力を喪失する者はタカヂアスターゼを用ひ快速に治するを得べしと、又本邦消化機病學の泰斗長與博士は曰く、予の實驗に依ればタカヂアスターゼは獨り胃の澱粉不消化を治するに有要なるのみならず慢性下痢に於ける腸不消化をも治するに適當なるを信すと、

信すべき統計に徴すれば消化不良の七割五分は實に澱粉不消化に起因すされはタカヂアスターゼは胃腸障害に對する最も有力なる藥物なり。タカヂアスターゼ發賣元三共合資會社は東京市日本橋區南茅場町より同區室町三丁目へ移轉せり從て當分本劑の包裝には新舊町名番地のもの混同して販賣せらる孰れも眞正品なり

●世に幾多の摸造品及類似品あり高峰博士發見のヂアスターゼを求めんには必すタカヂアスターゼと御指定あるべし各地の信用ある藥舗に於て取次販賣す



●消化力強大なるは總てのヂアスターゼ劑中タカヂアスターゼを第一位と爲す近く官報を以て發表せられたる本田博士の學位論文に徴するに坊間に販かる、多くのヂアスターゼはタカヂアスターゼに比し數倍乃至十數倍を用ゆるにあらざれば之と同効を收め難きなり、此くの如きは高峰博士の製法が他の總てに超絶して完全なるに由るものにして、これ以て一は眞正品他は摸造類似品たることを區別し得るなり、

タカヂアスターゼの說明書は發賣元たる東京市日本橋區室町三丁目拾番地三共合資會社へ御申越に從ひ無代郵送す

●營養增進の目的を以て虛弱者貧血者重病者等にタカヂアスターゼを用ゆれば能く消化を佳良にし營養自ら增進し體力速に恢復するを見る、殊に肺結核患者に之を應用すれば其効力著明なりされば、大阪高等醫學校長佐多博士は曰く、タカヂアスターゼは予が數年來肺結核患者の消化補給劑として用ひ有効を認めたる所とすと、又在京の栗本博士は曰く今や予は實驗に基きタカヂアスターゼが結核患者の消化障害に對する著効を確認すと、柴山博士にも亦此目的にタカヂアスターゼを使用したる結果多大の良成績を擧けたるを公示せられたり

●藥効均等論は輓近醫學者間に唱道せらる、所なり、内務省横濱衛生試驗所長西崎藥學士の研究論文中に曰く、タカヂアスターゼは各購求の時日と場所とを異にするものなれども其糖化の効力は固よりグリカーゼの効力も亦常に一定せりとタカヂアスターゼの効力毎常一定なるは其特長なりこれパークデビス社の如き規模の宏大なる者に於て始めて見るべきのみ。タカヂアスターゼの用量は一回〇・一—〇・三錠劑(〇・一三)なれば一錠—二錠每食後直に投與すべし而して此用量はタカヂアスターゼにのみ限ることを特に言明す

（後附の二）

私立大日本婦人衛生會 米澤支會規則

第一條 當會は私立大日本婦人衛生會米澤支會と稱し衛生上の研究を目的とし互に智識を交換し社會の幸福を增進するにあり

第二條 支會事務所は當時假に免許町一三六九番地猪股方に置く

第三條 當支會に會長一名副會長一名幹事五名を置く其任期は各一年とす

第四條 毎月一回（第二日曜午後一時より四時迄）講話會を開き毎年五月總會をなし役員改選庶務會計等の報告をなす

第五條 入會は會員の紹介を經て宿所姓名に會費を添へ事務所へ申込又退會せんとする者は其旨事務所に届出べし

但し既納の會費は返附せす

第六條 當支會の會費は左の三種として特別會員毎月金參拾錢通常會員

甲毎月金拾五錢乙毎月金五錢前納するものとす

但會費拾五錢以上納むる者には本會雜誌を配附す

第七條 會費は雜誌料として本會へ納め一部は支會經費に充て殘餘は銀行へ貯蓄して支會事業の資金となす

第八條 會員及員外篤志者より金品の寄贈あるときは役員協議の上特待員又は賛成員となすべし

第九條 講話の節は汎く婦人の傍聽を許す

第十條 支會々員は質素を旨とし集會の際は可成木綿服を著用する事

第十一條 特に支會則に掲げざるものは本部の會則を準用す

事務所米澤市免許町一三六九

米澤支會

私立大日本婦人衛生會 山形支會規則

第一條 本支會は私立大日本婦人衛生會々員山形市在住者を以て組織す●第二條 本支會に會長副會長の外幹事四名評議員若干名を置く會長副會長は公撰し幹事評議員は會長之を選任す 役員の任期は一ヶ年とす●第三條 本支會は毎月一回（第一日曜日）講話會を開き毎年一回（五月）總會を開き講話の外役員の撰擧庶務會計の報告をなす●第四條 入會せんと欲するものは宿所姓名並に第五條の通り會費を添へ會員に紹介を依賴すべし本支會を退會せんとする時は其旨幹事に申出づべし●第五條 本會々費は會計幹事に納むべし但し六ヶ月又は一ヶ年分新に入會のものは其月より六月又は十二月迄の分を一時に納むべし●第六條 服裝は精誠質素なるを要す上著羽織は絹布を用ゆるを禁す

明治三十三年二月四日創立

事務所山形市旅籠町新築西通二百八十九、北島氏方

山形支會

私立大日本婦人衛生會 宇都宮支會規則

第壹條 本支會は私立大日本婦人衛生會宇都宮支會ト稱ス●第貳條 本支會ニ會長一名副會長一名評議員拾五名幹事四名ヲ置ク會長副會長ハ公撰シ評議員幹事ハ會長之ヲ指任ス各役員ノ任期ハ一ケ年トス●第參條 毎月壹回（第一日曜日）講話會ヲ開キ毎年五月講話ノ外役員ノ改撰庶務會計ノ報告ヲナス●第四條 入會ハ宿所姓名ニ第五條ノ通リ會費ヲ添ヘ事務所ヘ申込ミ又ハ會員ニ紹介ヲ依賴スベシ本支會ヲ退會セントスル時ニハ其旨事務所ニ届出ヅベシ●第五條 本會々費ハ本會ト別ニ支會々費ヲ要セズ會費ハ一時ニ六ケ月又ハ十二月分、新タニ入會ノモノハ其月ヨリ六月又ハ十二月迄ノ分ヲ納ムベシ●第六條 本支會ハ別ニ支會々員ヲ置キ支會會費トシテ一ケ月金五錢ヲ納ムルモノトス●第七條 講話會ニ出席ノ節ハ成ルベク家族又タハ知合ノ婦人ヲ誘引シ傍聽セシムベシ●第八條 服裝ハ精誠質素ナルヲ要ス上著羽織ハ絹布ヲ用フルヲ禁ズ●第九條 特ニ支會規則ニ掲ゲザルモノハ本會ノ規則ヲ準用ス

事務所宇都宮市傳馬町七十三番地行森氏方

明治三十四年二月三日創立

宇都宮支會

私立大日本婦人衞生會 高崎支會規則（明治三十五年四月創立）

●第一條　當支會は大日本婦人衞生會に屬し汎く婦人をして人生の健康を保持する方法を講究し衞生上の智識を開發せしめ因て社會全般の幸福を增進するを目的とす●第二條　當支會は大日本婦人衞生會高崎支會と稱し事務所を高崎市寄居町五十番地に置く●第三條　當支會は高崎地方在住の本會々員と支會限りの支會員とを以て組織す●第四條　本會又は支會の會員たらんとする者は住所姓名及び會員の種類を詳記し三箇月分以上の會費を添へ申込まるべし●第五條　當支會に學術其の他の裨益を與へらるゝ人士を推して講師又は篤志贊助員となす●第六條　當會員にして轉居死亡又は退會の時は速に其旨事務所に通報せらるべし●第七條　支會に左の役員を置く會長一名副會長一名幹事六名評議員十二名●第八條　役員は會員中より公撰し會長副會長は役員中より互撰す又幹事評議員は役員中より會長之を指名す但役員の任期を一箇年とし再撰するを得●第九條　本會の特別贊成員を定員外の評議員とす●第十條　當支會は每月一回講話會を開き每年一回總會を開く者とす總會に於ては講話の外役員の改撰會務の報告等をなす●第十一條　會員及贊成員の家族竝に篤志贊成員は集會に參列するを得但時宜により男子の參列は謝絕することあるべし●第十二條　本會々員は本會費の外別に支會費を要せず支會限りの會員は支會費として一箇月金五錢を出す者とす●第十三條　總て會費の徵收は集會の席上に於てするを例とす但三ヶ月分以上前納すべし●第十四條　支會の所有金は支會の名義を以て銀行に預け置くものとす●第十五條　會員又は會員外より金員物品の寄附ある時は之を受納す●第十六條　本會所有の金員物品を慈善事業等に使用せんとするときは衆議に諮るものとす●第十七條　會員は服裝其他を質素にし集會の節は時間等を確實に履行すべし●第十八條特に此規則に掲げざる者は本會の規則を準用す

事務所高崎市寄居町五十番地

高崎支會

私立大日本婦人衞生會 新潟支會規則

●第一條　本會は大日本婦人衞生會に屬し婦人衞生の研究を目的とし兼れて一般慈善事業を爲すにあり●第二條　當支會の會費は左の六種とす終身會員一時限り出金貳拾五圓特別會員每月金參拾錢通常會員同金貳拾錢支會員甲每月金拾錢乙同金五錢●第三條　入會せんとするものは役員に申出て其承認を得べし●第四條　會費每月拾五錢以上を納むるものには本會衞生雜誌を配布す●第五條　會費は雜誌料として一部を本會へ納め殘金は銀行へ貯蓄して衞生慈善資金とす●第六條　支會には會長一名副會長一名　評議員十五名幹事五名理事一名を置く會長副會長は總會に於て公撰し評議員幹事は會長之を撰任す各役員の任期は一ヶ年とし再撰するを得役員は總て無給とす●第七條　支會は每月六日通常會を開き衞生及び慈善に關する演說をなすべし●第八條　每年一月總會を開き支會の要務を舉行す●第九條　本會は每年春期懇親會を催し時宜によりては慈善販賣店慈善演藝會等を開くことあるべし●第十條　天災事變に際し慈善救濟を要する場合に於ては特に會員中の有志者より物品の寄附を募ることあるべし會員外の篤志者より臨時金品の寄附あるときは役員の協議を以て特待員又は贊成員となすべし●第十一條　一般慈善事業の贊助天災事變の救濟の事務は役員會の決議によりて實施するものとす●第十二條　支會々員は服裝其他を質素にし集會の際は可成く綿服を著用すべし●第十三條　特に本規則に掲げざるものは私立大日本婦人衞生會の規則を準用す

明治二十九年四月創立

事務所新潟市本町通十三番戸中村しげ子方

新潟支會

明治二十六年四月四日第三種郵便物認可

私立大日本婦人衛生會徽章規程

第一條 大日本婦人衛生會會員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ



〇本會徽章料左の如し

〇通常會員章

第參號
メッキ製拾貳錢、送費六錢

第貳號
正銀製四拾錢、送費六錢

〇終身及特別會員章

第壹號
七拾錢（黑塗箱入 送費九錢）
六拾錢（桐箱入 送費六錢）



第二條 會員章は本會並に支會の集會に出席する場合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條 本會徽章は右の實價を以て會員に頒つ

〇入會注意

〇御入會の際は三ヶ月以上の會費前納にて申込まるべし會員章は上段記載の實價にて御頒ち申候へども送費とも必らず御前納のこと●東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼ね會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收人差出不申候但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料をも御納附相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候●追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす●會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局（東京麴町區富士見町郵便局）宛振出しあるべし●會費受領證を要する節は送費として郵券一錢五厘封入せられたし●轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

〇會員御紹介下され候御方には其人數丈の本會雜誌を進呈す

廣告料 一頁五圓半頁其二分一以下同之 ●特別廣告一頁拾圓半頁其二分一以下同之

本誌一部 定價貳拾錢

東京市麴町區富士見町二丁目三十二番地
發行所 私立大日本婦人衛生會（振替貯金口座東京一〇六〇〇番）

東京市本郷區駒込追分町三十番地
編輯兼發行者 莊司秋次郎

東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地
印刷者 今井甚太郎

明治四十三年二月十六日印刷
明治四十三年二月二十日發行 婦人衛生雜誌第二百四十三號

（毎月一回二十日發行）

印刷所 東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地 杏林舍